待兼山遺跡

大阪大学待兼山遺跡発掘調査団編

1984年3月

大　阪　大　学

待　兼　山　遺　跡

—大阪大学ラジオ・アイソトープ総合センター
建設に伴う遺跡発掘調査報告—

大阪大学待兼山遺跡発掘調査団編

1984年3月

大　阪　大　学

例　　言

1　本書は大阪府豊中市待兼山町，大阪大学石橋団地内に所在する待兼山（まちかねやま）遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は，大阪大学ラジオ・アイソトープ総合センター新営工事に伴う事前調査として実施した。

3　調査主体は大阪大学（総長山村雄一）であり，調査は大阪大学文学部助教授都出比呂志を調査担当者として，同文学研究科大学院生福永伸哉・同西本昌弘・同青谷尚美を調査員とし，大阪大学学生を調査補助員とする調査団を組織して実施した。

4　調査期間は1983年９月３日から10月11日までである。

5　発掘調査の参加者名，遺物と図面の整理・整図などの分担については，挿図目次および第１章に記す。とくに注記のない写真は都出の撮影による。

6　本書の編集は都出が行なった。執筆は第１章，第４章，第５章を都出，第２章と第３章の一部を福永，第３章を青谷が担当した。

7　英文抄訳は都出が担当したが，作成にあたり，大阪大学文学部助教授河上誓作氏および文学部講師 Carl B. Becker 氏の有益な御教示を得た。また，第３章の石器の石材に関して，大阪大学教養部地学教室の中世古幸次郎助教授の御教示を得た。図１の写真については大阪大学教養部地学教室から，また図20の写真については大阪大学50年史編纂室から提供を受けた。

待 兼 山 遺 跡

目　　次

例　言　　i

第1章　調査経過 ……都出比呂志……1

1　遺跡の立地と環境……1

2　調査経過……2

第2章　検出遺構 ……福永伸哉……7

1　立会調査の所見……7

2　発掘区の設定……7

3　土層の構成……8

4　発掘区の所見……10

第3章　出土遺物 ……11

1　弥生土器……青谷尚美……11

2　石　器……福永伸哉……24

第4章　待兼山遺跡と周辺の遺跡 ……都出比呂志……26

1　旧地形の復原……26

2　待兼山遺跡の性格……27

第5章　総　括 ……都出比呂志……30

English Summary ……31

図　版

図 版 目 次

図版

1　旧地形と大学の建物の関係図（岡村勝行製図）
2　1　発掘区北部東側斜面（北から）
　　2　発掘区南部（南から）
3　1　Bトレンチ南壁土層（北から）
　　2　発掘区南部K区トレンチ南壁（北から）
　　3　同上の土層拡大（北から）
4　1　Bトレンチ南壁土器片出土状態
　　2　発掘区北部土器片出土状態
5　1　弥生土器　壺　口頸部
　　2　弥生土器　壺　頸部・腹部
6　1　弥生土器　壺
　　2　弥生土器　甕
7　1　弥生土器　底部
　　2　弥生土器　底部
8　1　弥生土器　高杯杯部
　　2　弥生土器　高杯脚部
　　3　弥生土器　器台脚部
9　1　石器　剝片石器と石鏃（A面）
　　2　石器　剝片石器と石鏃（B面）
　　3　石庖丁半成品

挿 図 目 次

ページ

図1　マチカネワニ写真（大阪大学地学教室提供）……(2)
図2　文・法・経講義棟建設立会調査写真……(2)
図3　待兼山遺跡の位置（岡村製図）……(3)
図4　発掘地全景写真……(4)
図5　発掘作業風景写真……(4)
図6　石鏃出土状態写真（福永撮影）……(4)
図7　斜面部の土層堆積写真……(4)
図8　発掘調査から報告書までの作業過程（松木武彦製図）……(5)
図9　立会調査のトレンチと発掘区との関係（福永製図）……(6)
図10　発掘区北部土層断面図（Bトレンチ北壁，藤田友紀子製図）…(8)
図11　発掘区全体図（田中理恵子製図）……(9)
図12　弥生土器実測図 (1) 壺……(13)
図13　弥生土器実測図 (2) 壺……(14)
図14　弥生土器実測図 (3) 壺……(15)
図15　弥生土器櫛描文様拓影（堤和博拓本）……(16)
図16　弥生土器実測図 (4) 甕……(17)
図17　弥生土器実測図 (5) 壺・甕の底部…(18)
図18　弥生土器実測図 (6) 高杯・器台……(20)
（弥生土器については，福永，青谷，岡村，田中，藤田，平岡敬規，森島康雄，山中洋，小柳泰之実測，青谷製図）
図19　石器実測図（福永・松木実測，福永製図）……(23)
図20　1962年（昭37）当時の大阪大学（大阪大学50年史編纂室提供）……(28)
図21　猪名川水系の弥生時代遺跡の分布…(29)

表 目 次

表1　凸帯文と口縁部形態との対応関係…(15)
表2　口縁部の文様……(21)
表3　頸部・腹部における文様使用頻度…(22)
表4　頸部・腹部における文様の組合せ…(22)

第1章　調　査　経　過

1　遺跡の立地と環境

大阪大学構内の遺跡　遺跡は大阪府豊中市待兼山町1－1にあり，大阪大学石橋団地内の理学部サイクロトロン実験施設東側の丘陵斜面に位置している。標高で 50～55 m の範囲である。

今回の発掘調査の成果について報告するにあたり，まず，遺跡をとりまく環境と調査にいたる経過を述べておきたいと思う。

大阪大学豊中キャンパス（公式には「石橋団地」という）は，猪名川を西に見おろす丘陵上に立地する。丘陵の最頂部は，附属医療技術短期大学敷地内の標高 77.3 m の三角点付近であるが，キャンパス中央部付近は，50～55 m の標高となっている。学舎の造成工事によって自然地形はかなり改変されているが，いまなお旧地形をとどめるところも多く，かつての丘陵の尾根と谷との起伏のおもかげをとどめている。

1964年，理学部新築のための整地工事に際して化石ワニが発見され，大阪大学教養部地学教室を中心とする調査の結果，約35万年前の，第4紀の保存の良好な化石ワニであることが判明，マチカネワニと命名されて，世界的にも貴重な資料を提供したことは有名である。

しかし，人類の歴史の歩みを語る考古学的な遺跡が，この構内に存在することについては，これまで必ずしも充分な注意が払われてきたとはいいがたい。ところで，大阪府教育委員会が1969年に発行した『大阪府文化財総合分布図』[1]においては，正門西北部の「大高の森」の範囲に石塚古墳のポイントが示され（図版1のH地点），また桜井谷古窯址群の窯跡の分布する可能性ある範囲として，理学部建物付近までを包む線引きが施されている。このうち石塚古墳は「前方後円墳」と注記され，かつて豊中市教育委員会の文化財担当者によって，ここから埴輪片が採集されたという。

さらにグラウンドの北部，キャンパスのフェンスのすぐ外側には前方後円墳として著名な待兼山古墳[2]が存在する（図版1のB地点）。この古墳は三角縁神獣鏡1，鍬形石1，車輪石3，石釧1などの副葬品を有し，古墳時代前期における，この地域の首長層の古墳として特筆に値するものである。

さらに，この数年間における，文学部国史研究室の研究室員による分布調査や過去の出土資料調査の結果を総合すると，さらに別の地点にも遺跡の存在することが判明した。まず，キャンパスの北部から述べることとしよう。大阪経済法科大学教授村川行弘氏と神戸商船大学教授北野耕平氏の教示によれば，いまから二十数年前，上山池を埋めたてる造成工事の際に，教養

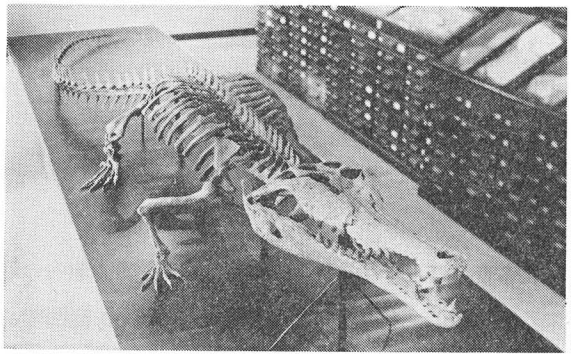


図１　マチカネワニ（大阪大学地学教室提供）

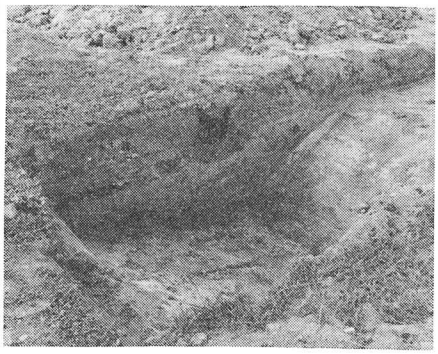


図２　文･法･経講義棟建設立会調査検出の溝

部特別教室（化学）の西南部の池の斜面において須恵器の窯跡があらわれたが，工事の進行に伴って盛土の下に埋められたという（図版１のＤ地点）。また，大阪府立渋谷高等学校教諭富田好久氏が上山池の周辺で，須恵器片を採集している。現在も同校に保管されている，この資料は上記の窯跡と関連するものとも考えられる。また，須恵器片は，北東部のグラウンドの造成時にも出土しており（図版１のＩ地点），その一部は公表されている[3]。

さらに中山池の北斜面で1983年に実施された植栽の工事に際して文学部大学院生福永伸哉は土師器の小片を採集した（図版１のＣ地点）。

このほか，附属医療技術短期大学敷地内の丘陵の尾根上に２～３個所のマウンド状の高まりがあり，礫の集積を認める部分もあるので，ここに墳墓に類する遺跡が存在する可能性がある。これについては，今後の調査が必要となろう（図版１のＡ地点）。

キャンパスの西南部地区においては，待兼山会館のある丘陵高位部は自然地形をとどめるが，この西斜面の刀根山寮の建設工事の崖面において豊中市教育委員会の文化財担当者が横断面Ｖ字形の溝状の落ちこみのあることを観察している（図版１のＧ地点）。

また，この北斜面の中山池の水辺には石垣の崩壊したものと思われる石塊群がまとまって認められる（図版１のＥ地点）。また1983年に実施された文学部・法学部・経済学部合同講義棟建設工事に際する立会調査の結果，ここに東から西にむかって併走する断面Ｖ字形の３条の溝が検出された（図版１のＦ地点）。遺物が伴わないため，年代や遺構の性格は不明であるが，上の２個所における所見を勘案すれば待兼山会館の立地する高位部を中心として中世の砦や山城が存在する可能性もあり[4]，今後の系統的調査が必要となろう。

ここ数年における上記のような調査結果をふまえて，豊中市教育委員会は1983年に大阪大学石橋団地全域を待兼山遺跡群として遺跡台帳と遺跡地図とに登録するにいたった。

2　調査経過

調査の契機　さて，1983年度事業として，理学部ラジオ・アイソトープ総合センター（以下

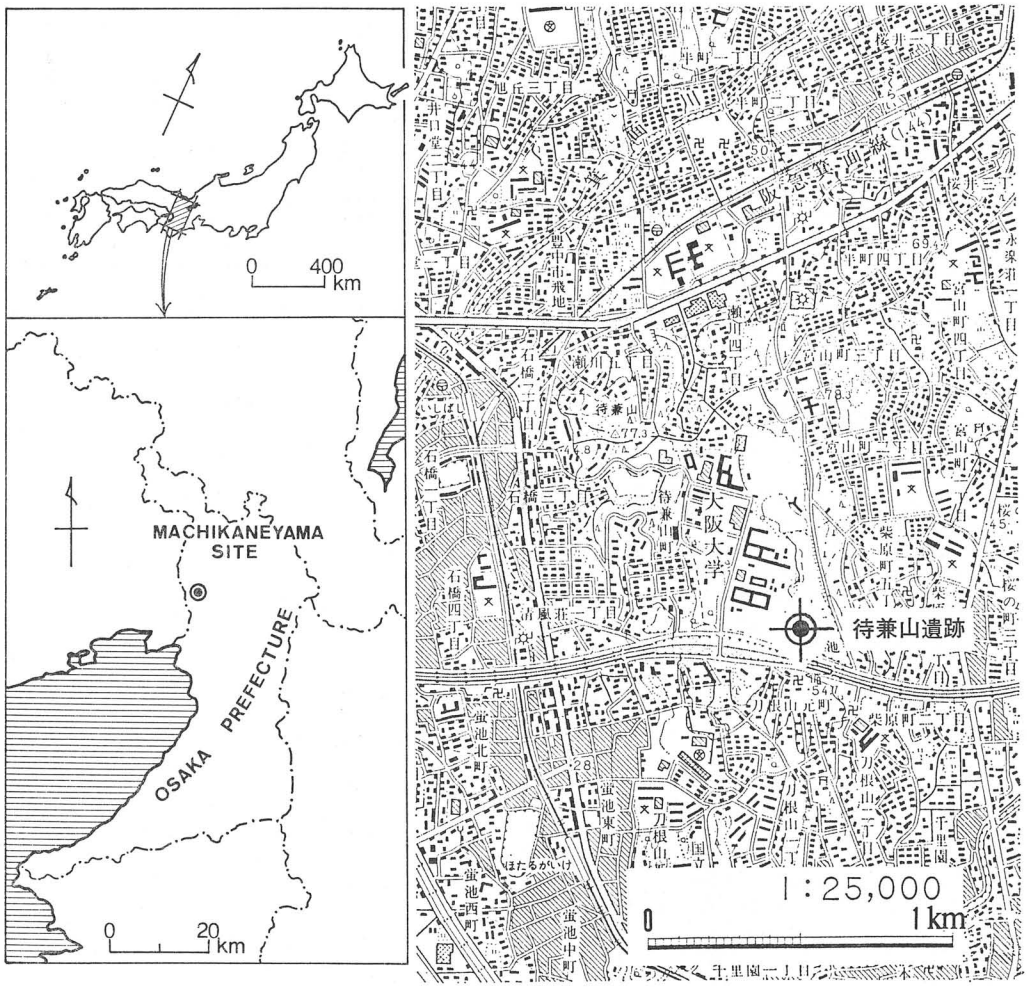


図３　待兼山遺跡の位置

ＲＩセンターと略称）の建設計画がもちあがり，豊中市教育委員会は４月25～30日の約１週間にわたって着工に伴う事前の埋蔵文化財の試掘の立会調査を実施した。この試掘調査の成果については第２章に詳述されるが，建設予定地の丘陵尾根の東斜面は旧地形を残していること，またここに弥生土器と石鏃を含む包含層のあることが判明した。これにもとづき豊中市教育委員会は「事業の計画区域内においては，立会調査の結果，発掘調査が必要とされますので，事前に詳細な調査を実施され，埋蔵文化財の保護に努められるようお願いいたします」との文書による申し入れを行なった。

これを受けて大阪大学は，工事予定地域内の発掘調査を実施することとし，山村雄一総長から，片山良展文学部長を介して，文学部助教授都出比呂志に調査担当者を依頼したい旨の依頼状がよせられた。以上の経過をふまえて，９月３日から10月11日までの約40日間発掘調査を実施したものである。調査団の構成は以下のとおりである。

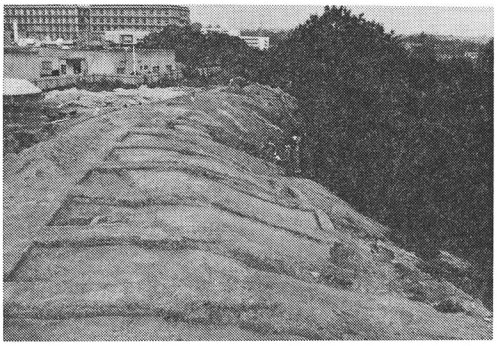


図4　発掘地全景写真

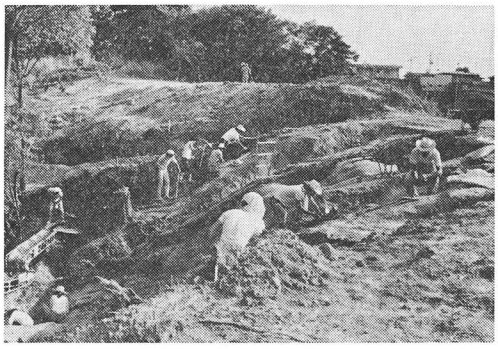


図5　発掘作業風景

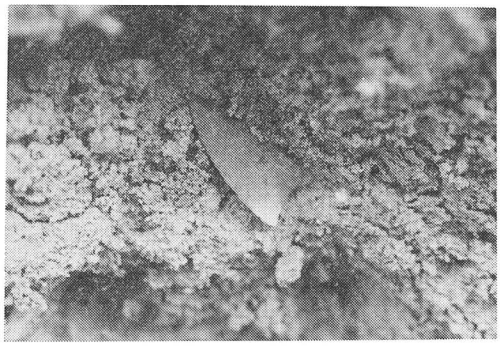


図6　石鏃出土状態

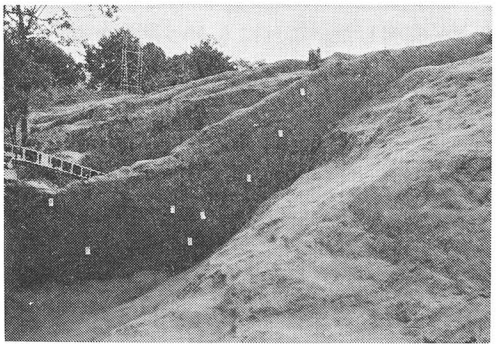


図7　斜面部の土層堆積

調査担当者　大阪大学文学部助教授　都出比呂志

調査員　大阪大学文学研究科大学院生　福永伸哉，同西本昌弘，同青谷尚美

調査補助員　大阪大学学生　寺田幸治，黒石哲夫，国木健司，岡村勝行，田中理恵子，藤田友紀子，谷佳奈子，加藤聡子（文学部），今津啓子，蜂屋晴美（文学部聴講生），堤和博，平岡敬規，森島康雄，山中洋，北尾悟，小柳泰之，野間伸次（教養部），鹿野正人，浦田孝之，北川哲也，武田真治，竹中郁，野村博，松本みゆき，前川晃一，赤木克行（大阪大学考古学研究会）

調査の進行過程については煩雑さを避けるために，図8にグラフ化して示すこととする。まず，東側斜面に堆積した塵埃や廃棄物を含む盛土を重機を用いて除去したあと，発掘区をAからMの各区に分け，畦畔を設定して手掘りによって表土以下を分層しつつ，下層へと掘り進んだ。9月初旬は何年ぶりという酷暑に悩まされ，9月後半から10月初旬には，これまた例年にない多雨のために作業の中断やトレンチ壁の崩壊などが続出し，当初予定の1ヶ月間の日程を延長せざるを得なかったが，10月初旬には遺構の実測，撮影などの記録作業に目途をつけ，10月7日には現地での公開説明会を開催した。説明会には学内外から約70名の人々の見学があり，また，新聞なども弥生時代の高地性集落が阪大構内で発見されたことを報じ，内外の関心を呼んだ。こうして10月11日に現場作業を終了させることができた。

遺跡の学術的評価に関する見解については

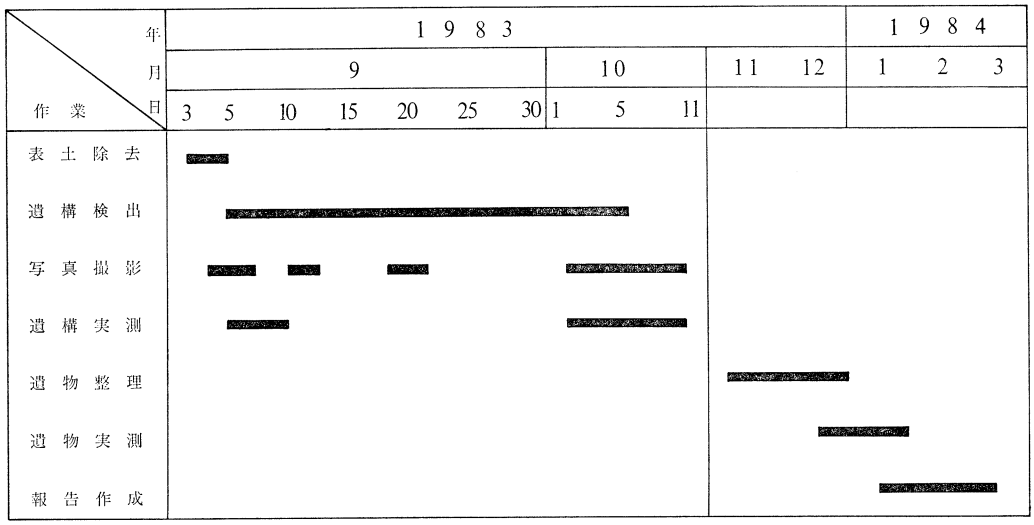


図8　発掘調査から報告書作成までの作業過程

第5章に要約するが，今回の調査範囲は弥生時代の集落の縁辺部にあたり，遺構の性格は集落の中心部と考えられる西方の高位部から流された土器片や石器が斜面に堆積したものと判断した。したがって，建物の建設計画を変更する必要はないと判断し，その旨を大阪大学総長に報告した。なお，遺物の洗浄・接合・復原・実測を含む報告書作成の作業については，1983年11月から1984年3月にかけて実施した。

謝辞　以上の調査の実施にあたり，大阪大学総長はじめ，本部事務局，理学部，文学部の方々にはいろいろな御迷惑をおかけしたばかりでなく調査の進行にあたっての数々の便宜を提供していただいた。

とくに，施設部部長堀口良氏，同企画課長山田善一氏，同課長補佐船越典照氏，同総務掛長本田重雄氏，同掛主任津村保氏，同工事経理掛西崎晋氏，同建築課長尾崎義信氏，同課長補佐山本政治氏，同建築第4掛長小谷智彦氏，経理部長中曽根武氏，同部主計課長何木亘氏らの各氏は，建設日程の変更や調査準備の点で奔走されたのみならず，しばしば調査地に出むかれて調査の進行をスムーズとすべく努力された。また理学部の学部長金森順次郎教授，国富信彦教授，柴田徳思助教授は，ＲＩセンター建設計画と遺跡調査との調整において尽力下さり，調査についても有益な助言をいただいた。

さらに，文学部長片山良展教授，事務長烏野守両氏からは調査体制の発足にあたり，様々な御援助を受けた。また長期計画委員会委員の中岡稔理学部教授および岡部健彦文学部教授は発掘地を訪れ，様々な助言を与えられた。

さらに豊中市教育委員会の柳本照男氏からは調査に関する行政指導ならびに周辺遺跡の研究成果の教示でお世話になった。

また文学部国史研究室の梅渓昇・黒田俊雄両教授，脇田修助教授，村田路人・大石雅章両助

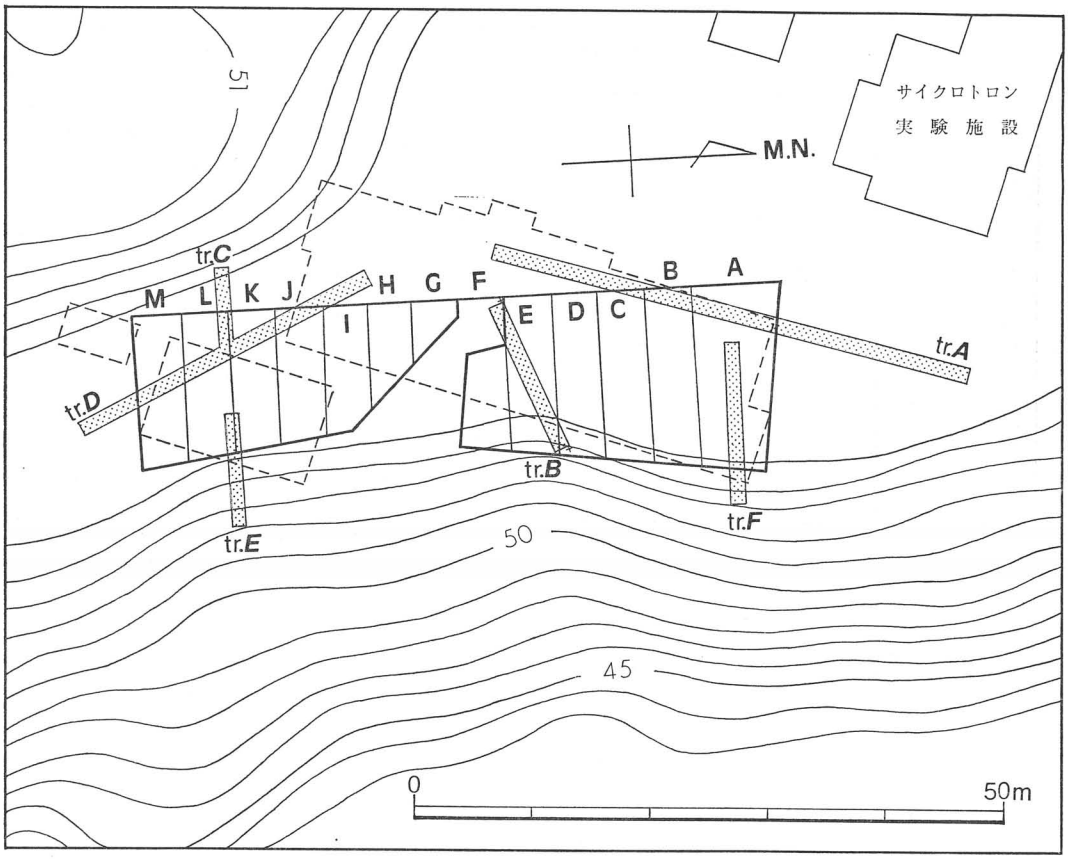


図9　立会調査のトレンチと発掘区との関係（破線は建物予定範囲）

手らは有益な助言を与えられるとともに，9月から40日間余りの発掘期間中における調査担当者の国史研究室における業務上の支障を補うべく，援助を与えられた。

また，建設工事を担当された安藤建設株式会社の作業所長松村圭造氏と橋本日出夫氏は，発掘作業の円滑化のために様々な労をとられた。

また，石器石材の鑑定で御教示を受けた教養部中世古幸次郎助教授，英文抄訳で御教示いただいた文学部河上誓作助教授，写真提供でお世話いただいた大阪大学50年史編纂室の大西愛氏にも大変お世話になった。このささやかな報告書は，これらの方々の御援助のたまものであることを明記し，謝辞としたい。

注 1）大阪府教育委員会『大阪府文化財総合分布図』1969年。
2）豊中市史編纂委員会『豊中市史』第1巻　1961年　pp. 43～47。
3）同上 p. 97 では，これを柴原乳母谷池北畦窯跡としている。
4）織田信長が，有岡城を攻略するために設けた砦の一つに刀根山の砦があり，名称から，大阪大学キャンパスに近いと考えられるが，まだ，その所在地は確定されていない。

第2章　検　出　遺　構

1　立会調査の所見

まず，はじめに1983年４月25日～30日に豊中市教育委員会によって行なわれた立会調査の概要を述べておこう。立会調査ではＲＩ総合センター建設用地となる部分の丘陵尾根頂部および斜面部に重機を用いて幅 1.5ｍのトレンチを５本設けた。丘陵頂部では既に理学部建設時に地山面まで達する削平を被っており，表土下は直接地山であるか，あるいは削られた地山土を含む礫混じりの盛土をはさんで，その下が地山という状況であって，遺構は全く検出されなかった（Ａ，Ｅトレンチ）。これに対してかろうじて削平を免れた丘陵尾根北部東斜面のＢトレンチにおいては，えぐり取られたような地山層の急激な落込みがトレンチ断面に検出された。そして，この落込み内堆積土中より石鏃１点と弥生土器とみられる土器片が出土した。これによって丘陵上には弥生時代の遺跡が存在していたことが明らかとなった。このＢトレンチ南壁の土層を観察すると，丘陵頂部側から東にむかってなだらかに下ってきた地山層が肩部をつくって 1.5ｍほど急激に落込み，再びゆるやかに傾斜して下っていくのが認められた。この地山層の急激な落込みは自然のものとは考え難い状況であり，また堆積土中に遺物を含むことから，丘陵上の集落をとりまく環濠の一部となる可能性が考えられた。また，この落込みの中に幅３ｍ，高さ１ｍの極めて堅く締った土塁状の盛りあがりが認められ，当初は土塁をはさんで両側に溝がめぐるような防禦的機能をもった環濠の可能性も考えられた。このような地山層の落込みは丘陵南部の東斜面でもＥトレンチの東端においてかろうじて確認されたが，落込み内堆積土はＢトレンチのものとは異なり，遺物も皆無であった。この丘陵南部斜面の落込みがＢトレンチで検出された落込みと連続するのかどうか，またその性格は同じなのかなどの点についてはトレンチのみによる立会調査では十分解明しえなかった。なお，丘陵西斜面部では地山層は東から西にむかう自然の傾斜にそって下り，斜面の堆積土中にも遺物などはみられないことから，この部分には遺構は存在しないと考えられた（Ｃトレンチ）。

2　発掘区の設定

立会調査の所見により丘陵東斜面に削平を免れて旧地形が残存していることが判明したので，この部分を発掘の対象地区と選定し，南北約 50ｍ，東西約 10～15ｍの長方形の発掘区を設定した。将来的には待兼山遺跡群全域を包括する統一的な地区割りを行なう必要があるが，今回は例外的に発掘区の南北主軸線は磁北を基準とした。この南北主軸線を基準に 4.0ｍ間隔の小区画を設け，北から順にＡ区～Ｍ区の名称で表わすことにする（図９）。そして，各

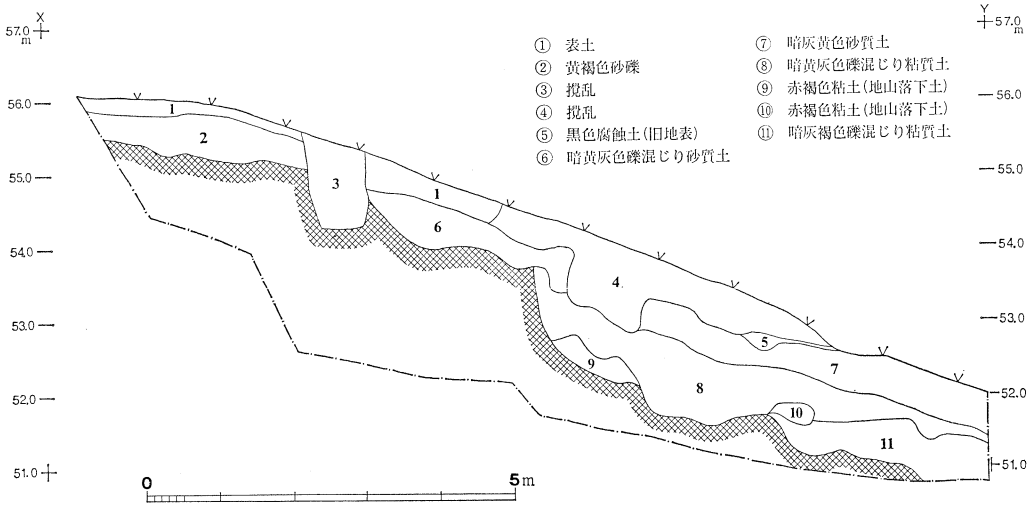


図10 発掘区北部土層断面図（Bトレンチ北壁）

区とも北側に幅 1.0 m の土層観察用の畦畔を設けた。なお，発掘の進行にともないA区北部に約 2 m ほどの幅で発掘区を拡張したが，この部分もA区に含めることとする。また，F区とG区の間では高さ 1 m ほどの落差があり，F区以北のほうが低くなっている。この丘陵南北の現状での落差は理学部建設時の削平のためであって旧地形を忠実にあらわすものではないが，以下の記述では便宜的にF区以北を発掘区北部，G区以南を発掘区南部と呼びわけることにする。

3 土層の構成

当遺跡中で旧地形が最も良好に残存している部分と考えられるBトレンチの断面観察を行なった。土層観察結果は図10に示し，分類した土層に ①～⑪ の土層番号をつけて表わした。なお，各土層の名称は図に注記した。

まず，上層ではかなりの攪乱がみられる（③④）。① は現在の表土であるが理学部建設時に削平した土砂を盛土したものであり，B区やC区ではこの層中からも弥生土器が多く出土した。この盛土の下に地山の二次堆積と考えられる黄褐色砂礫層②が存在する。⑥，⑦ は地山層の溝状落込みがほぼ埋まったあとに流れ込んだ土である。⑦ からは時期不明の土器細片が少量出土しているが，焼成や胎土からみて弥生時代よりも新しい時期のものと考えられる。このことは付近に別の時代の遺跡が存在する可能性を物語っている。この⑥，⑦ の下に地山層の急激な落込みがみられる。落込み内には暗黄灰色礫混じり粘質土層 ⑧ が短時間のうちに一気に堆積した状況で存在しており，弥生中期の中頃から後半に限定される土器片を多量に包含していた。この堆積土の下に溝状落込みの東側立上り部分の痕跡と考えられる地山土（赤褐色粘土⑩）がトレンチ東端で検出された。ところが，トレンチをさらに東に拡張したところ，この地

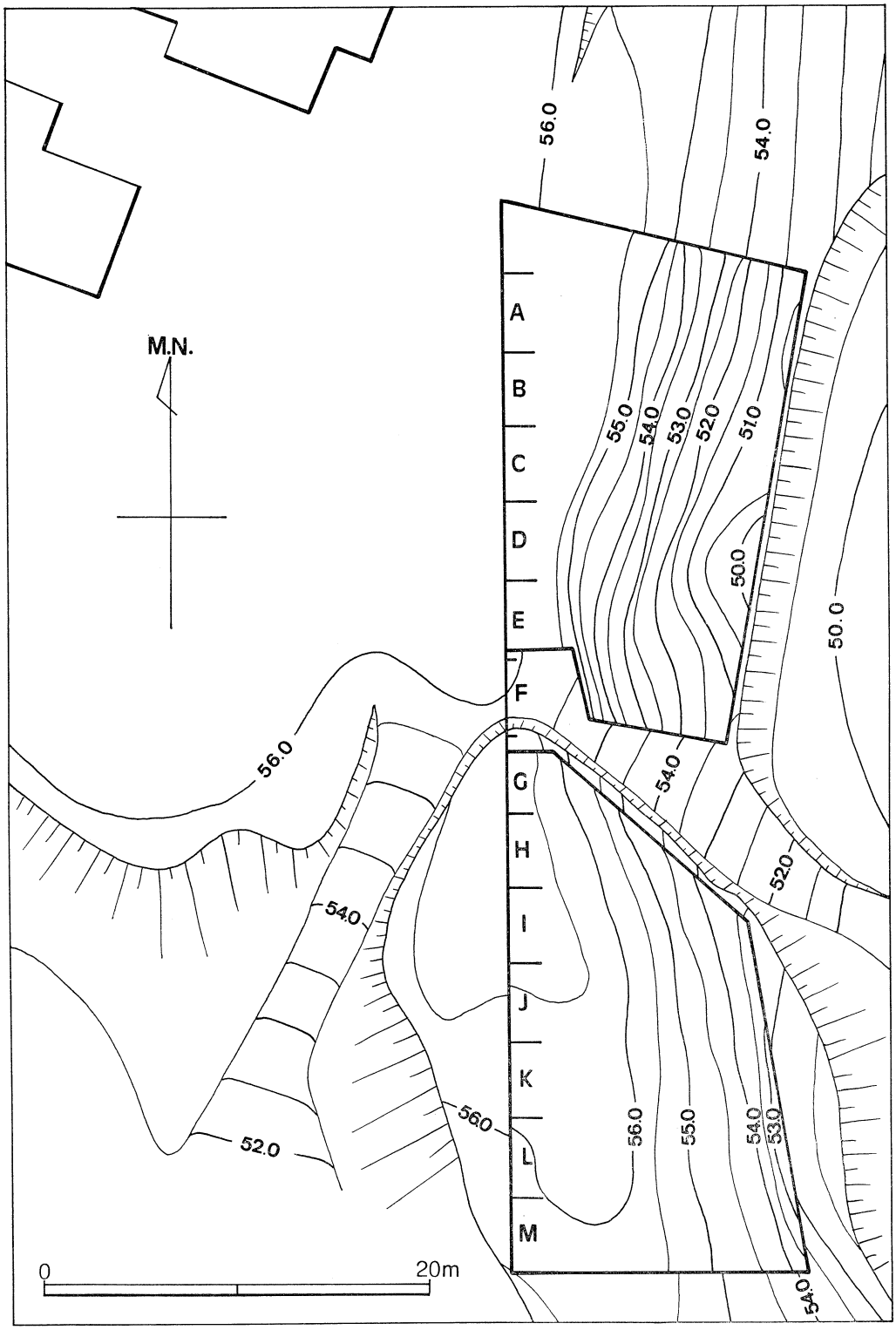

M.N.
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
56.0
54.0
55.0
54.0
53.0
52.0
51.0
50.0
50.0
56.0
54.0
52.0
54.0
52.0
56.0
56.0
55.0
54.0
53.0
54.0
0
20m

図11　発掘区全体図

山土の立ちあがりは地山土がブロック状に二次堆積したものであり，その下に弥生時代の遺物を含む暗灰褐色礫混じり粘質土層⑪が存在することが判明した。したがって，この溝状落込みは立会調査で想定したような環濠の一部ではなく，豪雨などにともなう急激な土石流によって丘陵斜面がえぐりとられたものと判断した。また，立会調査時に土塁の可能性もあるとした堅く締った土の盛りあがりは他のどの発掘区でも検出されず，人工的構築物となるものではないことがわかった。

4　発掘区の所見

発掘区北部（A～F区）　ここでは先にBトレンチの土層断面図に示したような地山層の急激な落込みがみられ，落込み内堆積土からは弥生中期の中頃から後半の土器片が多量に出土した。また，この落込み内には地山落下土が各所でみられ，その下からも土器片が検出される。こうした状況から判断して，この遺物を含む土砂の流れ込みは短期間の，それもかなり激しいものであったと考えられ，その過程で上部の地山が崩壊して斜面に転落したのであろう。地山層上面にかなり凹凸があることもそれを物語っている。

なお，発掘区北部では表土中からまとまった土器片が各所で発見されて我々を驚かせた。この表土は理学部建設時に削られたと考えられる土の二次堆積物であるから，発掘区の西側の丘陵高位部にあった遺跡が約20年前の理学部造成時に破壊されたことが判明した。

発掘区南部（G～M区）　当初地山層の急激な落込みは発掘区南部の東斜面にも延びていると想定されたが発掘の結果，発掘区南部には落込みは検出されず遺物包含層も存在しなかった。立会調査時にEトレンチ東端で確認されていた地山層の落込みは，丘陵尾根の地山傾斜の急な部分に地山の二次堆積土がのっているものとわかった。旧地形を復元してみるとD，E，F区付近で地山がくびれており，西側の丘陵高位部から流れ落ちてきた遺物を含む土砂はこのくびれ部分に導かれて流れ込んだために発掘区南部東斜面にまでは殆ど達しなかった，あるいは達していたとしても今回の発掘区よりも下方の斜面に流れて行ったものと考えられる。

ただ，M区において表土中から弥生土器の高杯脚部（図18―7）が採集されたことは注意しておく必要がある。今回の調査の性格から，M区より南は工事予定地からはずれるために調査対象からはずしたが，M区以南の丘陵尾根上に弥生時代の遺構が遺存している可能性があり，今後，調査と保存の施策が必要となろう。

第3章　出　土　遺　物

1　弥生土器

本遺跡より出土した土器には，壺形土器，甕形土器，高杯形土器，器台形土器等があり，すべて弥生時代中期（畿内第3・第4様式）のものである。総数約1,500点であるが，完形品はなく，小片がほとんどである。また，土器の表面の磨滅，風化が進んでいることもあって，器種の判別の可能なものは，うち150片余りにとどまる。ここでは，実測可能なもの，分析に耐え得るものを，できるだけ図化し，掲載するように努めた[1)]。

まず，それらの出土土器について実測図と対照しながら説明し，次に文様構成の特色に関して，若干の考察を試みることにする。

(1)　**壺形土器**（図12～15，図版5～7）

口縁部から頸部にかけての形状がわかるものが1点（図12―4）ある他は，すべて，口縁部，あるいは，頸部，腹部，および底部の破片である。まず口縁部を，その形態によってA～Dに分類して[2)]，順次説明を加え，続いて頸部・腹部・底部について解説する。

壺形土器A（図12―1・2）　口縁端部を上下に若干拡張，断面が三角形状になるもので，漏斗状にひらく口頸部に続くと考えられる。口径は，30～35 cm である。

1の端面には，凹線文が3条施される。内面は，土器の表面が荒れているため，観察が困難な状態ではあるが，おそらく無文であろう。2は端面，内面とも磨滅のため，文様の有無は確認できない。色調は黄褐色で，1 mm 大の石英粒を多く含む。

壺形土器B（図12―3・4・11）　口縁端部の拡張が大きく，他のタイプの壺形土器では，端面の幅が，1.5 cm 程度であるところを，このタイプでは，2.5 cm 程度にまで拡張している。端面は凹線文と円形浮文で飾る。内面には，櫛描列点文による加飾が見られる。口径は，26.5～45 cm にまたがる。

3は風化が激しく内面の文様の有無は確認できない。端部は主として上方へ拡張する。端面には凹線文4条が施され，その上に，直径 1.8 cm の円形浮文が貼付されている。残存率が約1割であるため，円形浮文は1個しか確認できず，従って貼付間隔など，円形浮文が，どのような法則のもとに口縁部をめぐるのか，復原することはできない。4は，本遺跡出土土器のうち，口縁部から頸部にかけての残存状態が最も良好なものである。口縁端部の拡張は，上方に小さく，下方に大きく，凹線文4条と円形浮文を施す。内面には，櫛描列点文を綾杉状に2列に施す。2列の櫛描列点文の施文方向は，外側は時計回り，内側は反時計回りである。円形浮文は，2個しか確認できないが，2個あるいはそれ以上の数個が組になり，口縁部端面の何箇

所かに配されるものと考えられる。頸部には凹線文が7条まで確認できる。口頸部外面に縦方向，内面に横方向のハケメが確認できるほかは，全体として，ナデ調整が施される。11の口縁端部は，下方にのみ拡張するものであり，端面には3条もしくはそれ以上の凹線文と円形浮文が見られる。円形浮文の貼付間隔は不明である。内面には，時計回り方向の櫛描列点文が1列確認できる。いずれも色調は黄褐色で，比較的粗い石英粒，長石粒を含む。

壺形土器C（図12—5） 直立した頸部から外側へ曲折し，水平に近い口縁部内面に続くもので，端部は上方へ拡張する。口径は 11.5 cm で，今回出土した壺形土器の中では最も小さい。色調は黄褐色で，石英粒，長石粒を含む。

壺形土器D（図12—6・7・12～14） 口縁端部を上下に若干拡張する。斜め上方へ漏斗状にひらく口頸部から短く外反して口縁部に続き，口縁部内面には，1～1.5 cm 程度の水平に近い面が形成される。ここに，櫛描文が施されることが，しばしばある。

このタイプでは，口縁部の端面と内面を櫛描文で飾ることが多く，これを1つの特徴として指摘できる。口径は 15～25 cm，口縁部端面の幅は 1～1.5 cm 程度である。

7・13・14の端面には，櫛描波状文が施される。6・12については，磨滅のため確認できない。内面への加飾は14以外で見られる。櫛描扇形文[3]を用いる例が多く，6・12・13に見られる。扇形の中心角は20～30度と小さく，12のように，扇形を描くというよりは櫛原体を横に動かしただけの擬似的なものもある。施文方向は，12・13は時計回り，6は不明である。7の内面には櫛描波状文を施す。波形の山が左に傾いた形の，いびつな感じのする波状文である。12の口頸部内面には，横方向のハケメが見られる。6・12・13の色調は黄褐色，7は茶色，14は茶褐色を呈し，2 mm 以下の石英粒，長石粒を含む。

以上，本遺跡出土の壺形土器口縁部をA～Dの4タイプに分類し説明を加えた。これらは，すべて，畿内第3・第4様式に属するものであり，さらに凹線文の発達を指標に第3様式を古・新の2段階に分けると，A・Dは第3様式古段階，Bは第3様式新段階，あるいは第4様式に多いタイプであるといえる。

壺形土器頸部・腹部（図12—4・8～10・15，図13，図14） 頸部を飾る文様としては刻目凸帯文（図12—8・9），指頭圧痕凸帯文（図12—10），凹線文（図12—4・15），櫛描文（図13—4・6）がある。

図12—8・9は，刻目凸帯文を貼り付けた例である。残存状態が悪いので，原体の判別はできない。9の腹部には粗い縦方向のハケメが走る。10は指頭圧痕を加えた凸帯文である。指頭圧痕凸帯文については，『紫雲出』における佐原真氏の考察[4]があるが，これによれば，10は中期3[5]の，「扁平な粘土紐をめぐらしてから，指頭圧痕文をつけるという便法」の段階であり，8・9は中期4の「指頭でなく篦圧痕文をもちい」る段階にあたると考えられる。これらの凸帯文を貼り付けるのは，どのようなタイプの壺形土器に多いかを，他遺跡の資料より類推してみ

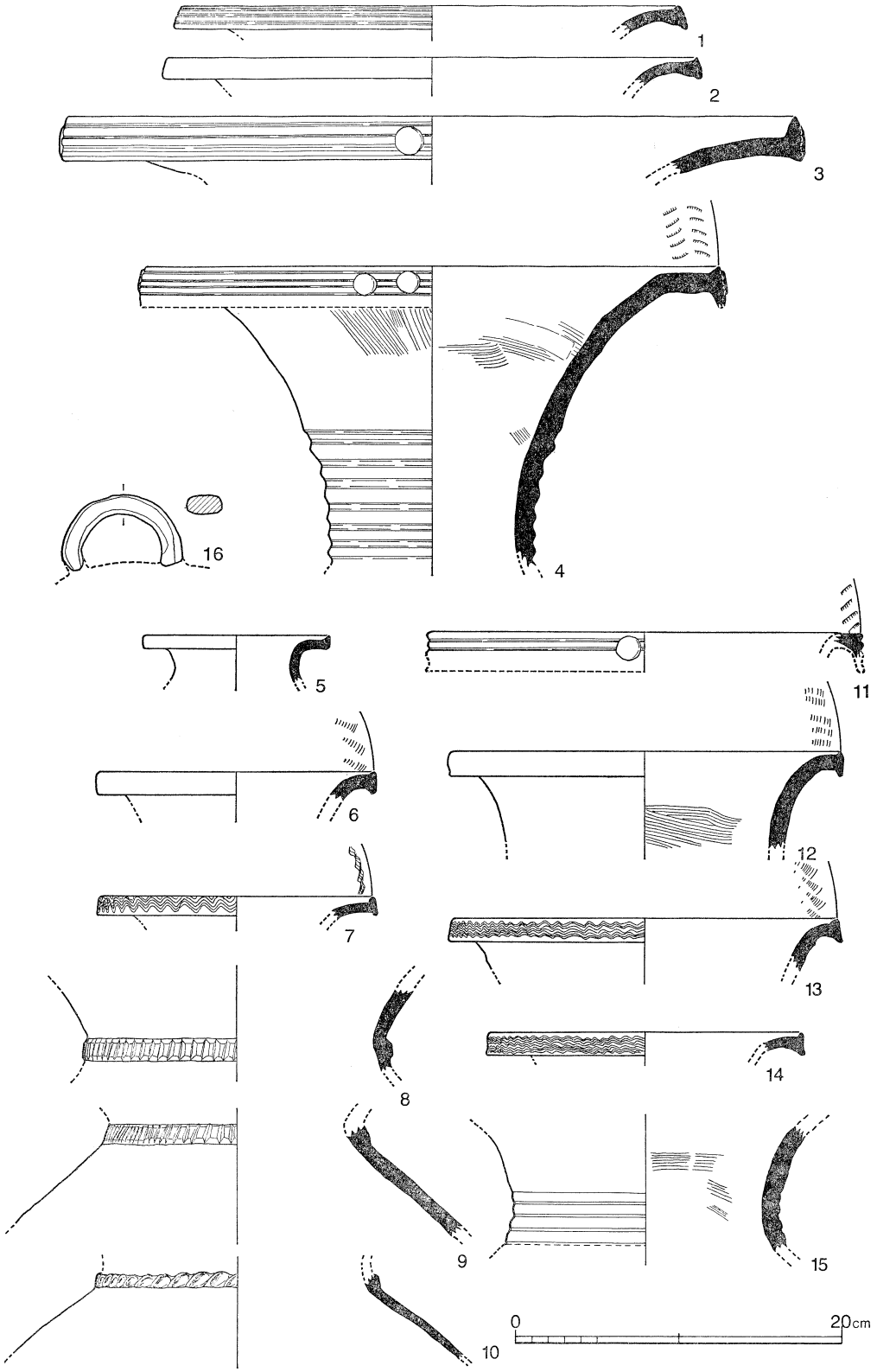


図12　弥生土器実測図（1）壺

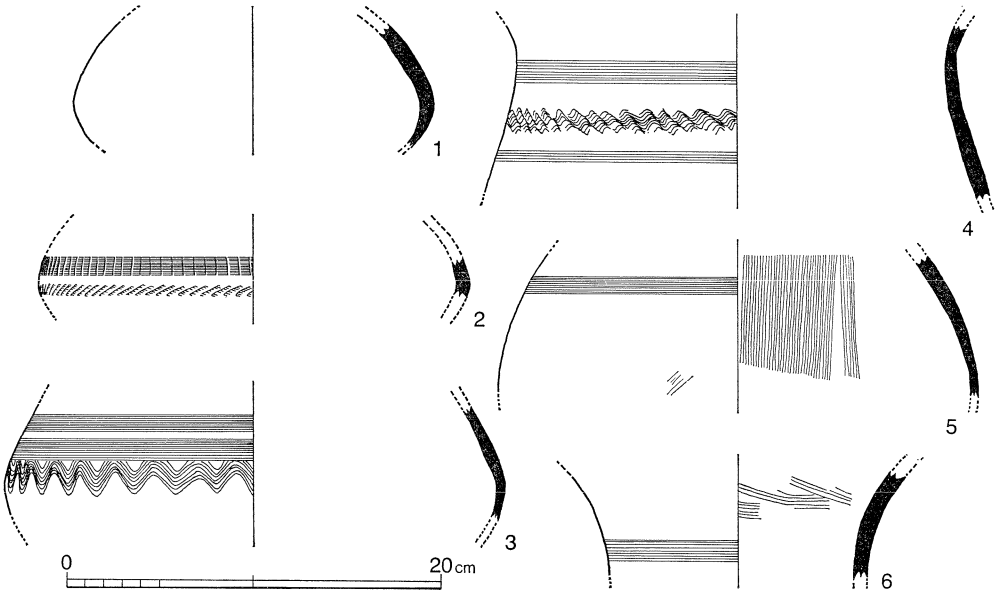


図13 弥生土器実測図 (2) 壺

よう。表1は待兼山遺跡に比較的近い摂津地方の数遺跡について，報告書[6]掲載の実測図より，指頭圧痕凸帯文と刻目凸帯文が，どのような口縁部をもつ土器に貼り付けられているかを集計したものである。これによって，指頭圧痕凸帯文は主として，口縁端部の拡張の小さな広口壺形土器（壺Ⅰ），および甕形土器に貼付され，刻目凸帯文は頸部から外反して，上方へ屈曲する口縁部をもつ広口壺形土器（壺Ⅲ）に用いられることがわかる。本遺跡からは，壺Ⅲの口縁部と思われる土器片は出土していないが，8・9に続く口縁部も，このタイプであると考えられる。

頸部に凹線文を施したものは，図12—4・15の2点である。「ヨコナデ手法によってほどこした一種の沈線文」[7]という点では共通するが，両者には，それぞれ別の特徴がある。まず，4の凹線文は，凹部と凹部の間が 1.5 cm であるのに対し，15では 0.8 cm と狭い。また，断面を比較すると，4の場合は凹部と凸部が同じような調子で起伏を連ねるのに対し，15は凸部が広くて凹部が狭く，篦描沈線的である。これらの違いは，あるいは，これらに先行する壺形土器頸部の断面三角形凸帯文，櫛描直線文の流れを，それぞれくむことに起因するからであろうか。なお，15の凹部に沈線を2条ひいたような痕跡が観察できるのは，これが，「ヘラ様の工具の先端を用いて沈線を一本ずつ引き，さらにその上をヨコナデすることによってつくった凹線文」[8]であることを示すものであろう。

図13—4・6は，頸部に櫛描文を施す例である。4は頸部から腹部にかけて櫛描直線文と櫛描波状文を交互に重ねているが，文様帯の両端は櫛原体の押え方が弱く，不明確である。

これらの土器片のうち，15は茶色，他は黄褐色系の色調であり，いずれも胎土には石英粒，

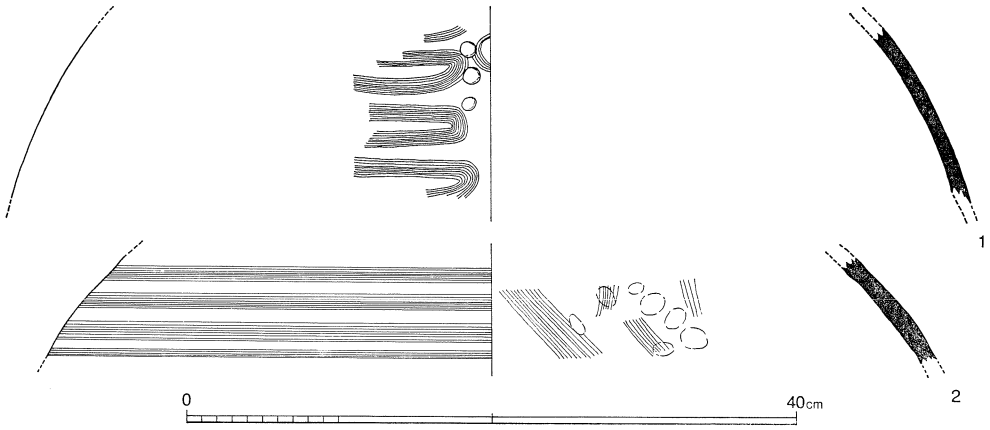


図14　弥生土器実測図　(3)　壺

長石粒を含む。

図13—1～3は壺形土器腹部の最も横に張った部分である。1は表面風化のため，文様，調整の確認はできない。2は櫛描簾状文と櫛描列点文を施すものである。この文様構成は，河内地方に多いものであるが，この土器片の胎土は典型的な河内地方のものではない。ただし，本遺跡出土土器に最も多く見られる，黄褐色系の胎土とも，若干異なるようである。茶褐色系で，1mm 大の石英粒，長石粒を含む。3は櫛描直線文を数帯重ね，最下端の文様帯に櫛描波状文を加えるものである。1・3は黄褐色で，石英粒，長石粒を含む。

図13—5と図14—1・2とは腹部上半部である。5は櫛描直線文が1帯確認できるが，これ

表1　凸帯文と口縁部形態との対応関係

遺　跡	凸帯の種類	壺　Ⅰ	壺　Ⅱ	壺　Ⅲ	甕	計
加　茂	指頭圧痕	1	2		2	5
	刻　目					
栄　根	刻　目			2		2
田　能	指頭圧痕	8	3	4	16	31
	刻　目		2	2		4
勝　部	指頭圧痕	7	2		5	14
	刻　目			4		4
東奈良	指頭圧痕	2	2	1		5
小　計	指頭圧痕	18	9	5	23	55
	刻　目		2	8		10
合　計		18	11	13	23	65

※　壺Ⅰ・壺Ⅱは，壺形土器のうち，外反する口縁部をもつ広口壺形土器である。壺Ⅰは，口縁端部がそれほど拡張されないもの，壺Ⅱは口縁端部の拡張が，著しく大きいものである。壺Ⅲは口頸部から屈曲して上方に向って立つ口縁部をもつ広口壺形土器である。

※※　刻目の原体には，ヘラ，ハケ，貝殻腹縁，爪がある。

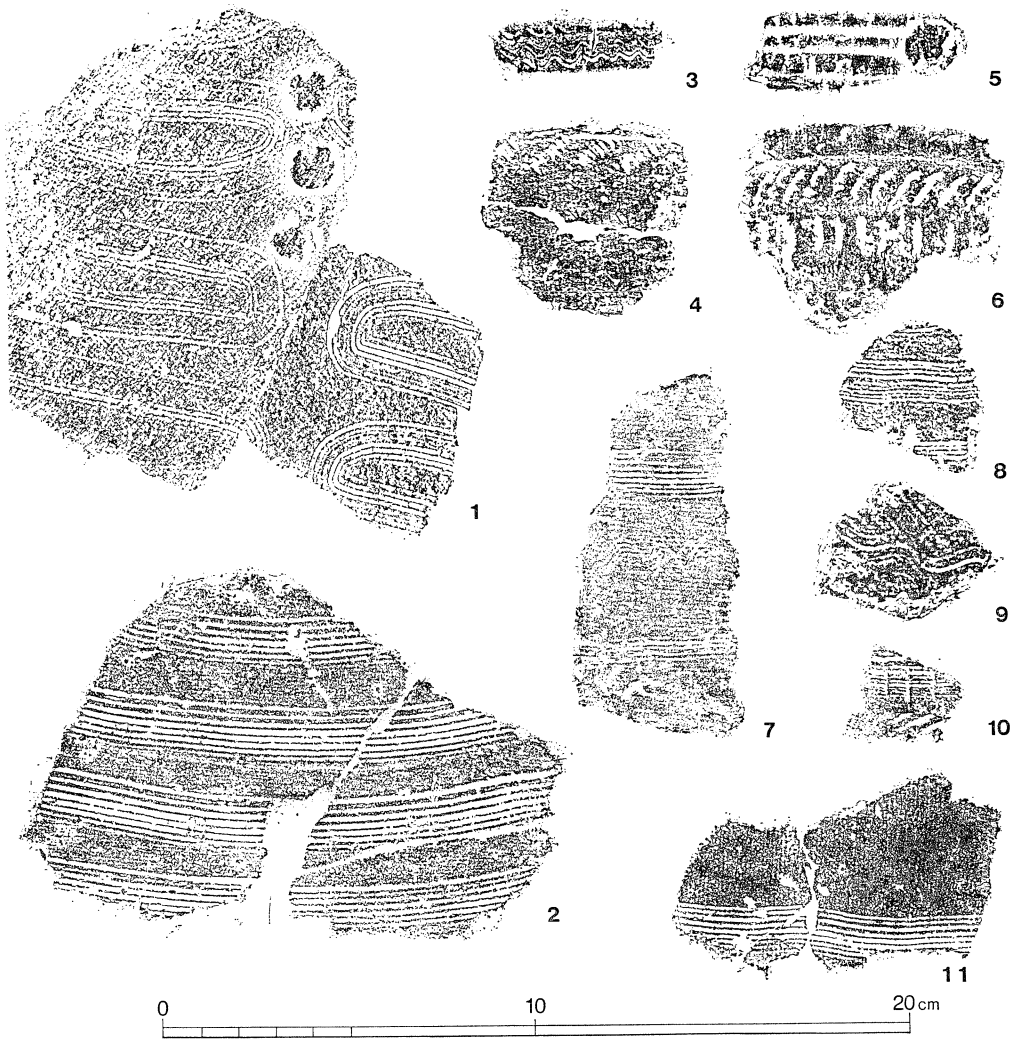


図15 弥生土器櫛描文様拓影

は最下端の文様帯にあたると思われる。図14—1・2は腹径が 60 cm 以上の大型の土器である。1は縦型の櫛描流水文を描き，その上に円形浮文を縦に並べたものであり，黒斑部にあたる。2は，櫛描直線文を重ねたもので，内面には縦方向のハケメおよび指頭圧痕が観察できる。いずれも，赤っぽい黄褐色で，2 mm 以下の石英粒，長石粒を含む。

このように，本遺跡出土の壺形土器の頸部・腹部には櫛描文が盛んに用いられ，これは第3様式に特徴的な事象である。また，頸部の凸帯文は凹線文出現段階から盛用段階にかけて用いられた文様であると考えられる[9]。頸部の凹線文も，これと同時期であろう。現在，畿内第3・第4様式の土器については，いくつかの細別案が提示されているが，一応，現段階でいえることは，まず，凹線文出現以前と以後の二段階が設定でき，凹線文出現以後については，さらに櫛描文盛用の段階と，櫛描文が衰退して凹線文が盛用される段階に分けられることである。こ

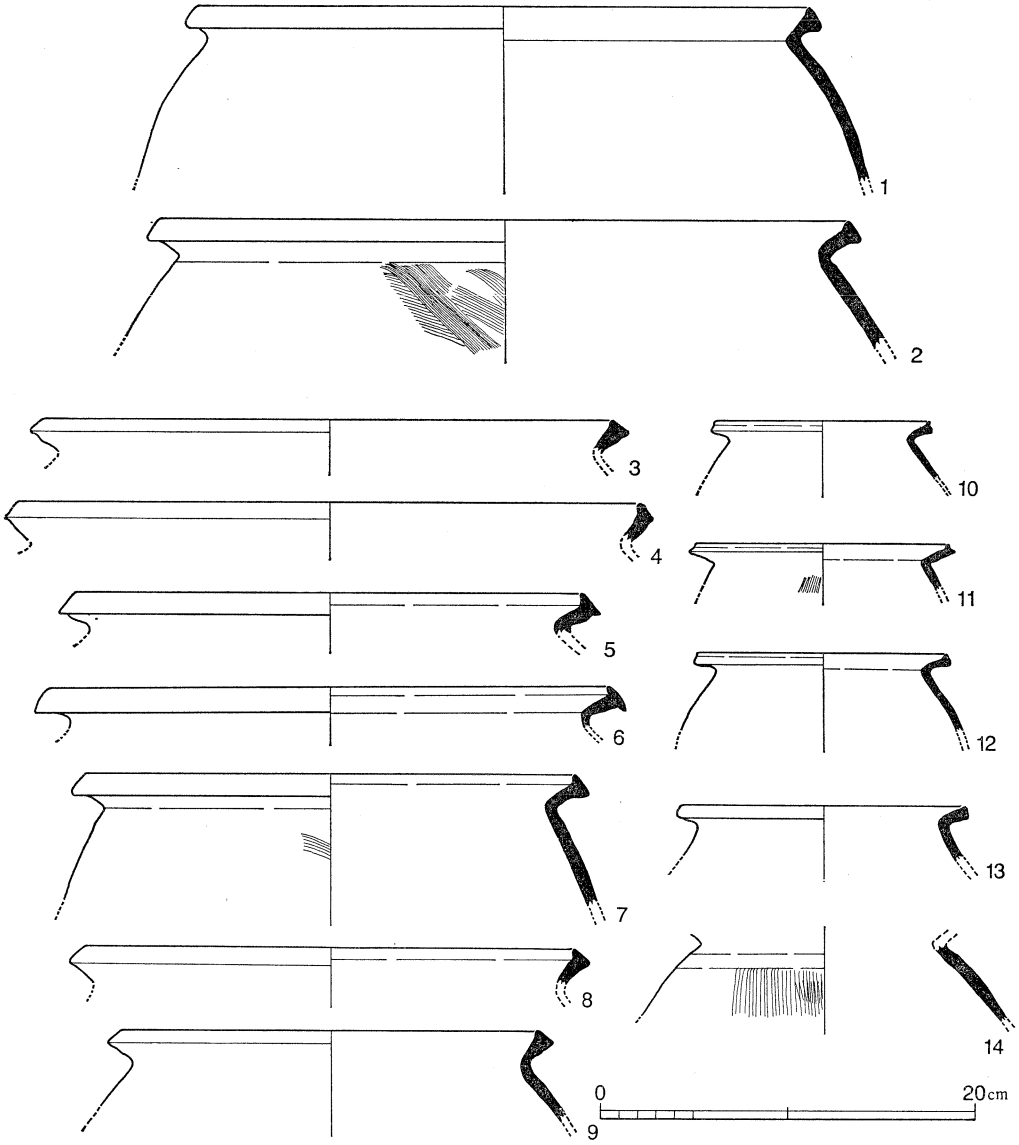


図16　弥生土器実測図（4）甕

れを『弥生式土器集成』[10]で用いられた呼称に従って言えば，第3様式古段階，同新段階，第4様式となるが，頸部の凸帯文は，このうち，第3様式新段階，第4様式に多い文様といえる。

壺形土器底部（図17—1～9・16）　底径が 6～9 cm のものが多い。風化と磨滅のため，調整不明のものが多いが，外面については側面に縦方向のヘラミガキ（6・9）が確認できる。内面については，1において縦方向のハケメや，底付近で時計回りにハケメ原体を止めながら横方向のハケメを施している状態が，よく観察できる。いずれも，黄褐色ないし，淡い茶褐色系の色調をおび，2 mm 以下の石英粒，長石粒を多く含む。クサリ礫の微粒子を少量含むもの（6～8）もある。

(2) **甕形土器**（図16，図版６—２・図版７）

口径が 20～40 cm の，比較的大きな甕形土器Ａと，口径が 10～15 cm の，小型の甕形土器Ｂがある。口縁部から体部へ「く」の字形に，あるいは丸みをおびた形で屈曲しており，胴の張った体部に続くと考えられる。端部が上方あるいは上下に拡張されるものが多く，端面の下部が外側へひろがる形で斜めに傾く。

甕形土器Ａ（図16—１～９）　口縁部の端面が広く，断面が三角形を呈するものである。端面はほぼ平らで，端部は主として上方へ拡張するもの（４・５・７～９）が多く，上下に拡張するもの（６）もある。また，１・２・３は，６ほど明瞭に，かつ大きく拡張していないが，わずかに上下に拡張するものである。端面下端から頸部に至る口縁下半部に注目すると，ここに数種の形態があることがわかる。１は，体部から屈曲して，すぐに断面三角形状にふくらむ端部を形成しており，口縁下半部は，長さ 0.5 cm 程度の曲面を経て，すぐに拡張部に移る。他は長さ 1.0～1.5 cm の面をもつが，頸部の屈曲部から口縁下半部まで，そりかえるように続くもの（７）と明瞭な端部拡張部への変化点をもつもの（６）が最も極端な例であり，その他のものは両者の中間的な形をしている。また，口縁下半部が内湾気味のもの（１・２・６～８）と，外湾気味のもの（３～５・９）の二種類に分けることもできる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整をする。体部は斜め方向（左上から右下へ）のハケメ（２・７）が確認でき，またヨコナ

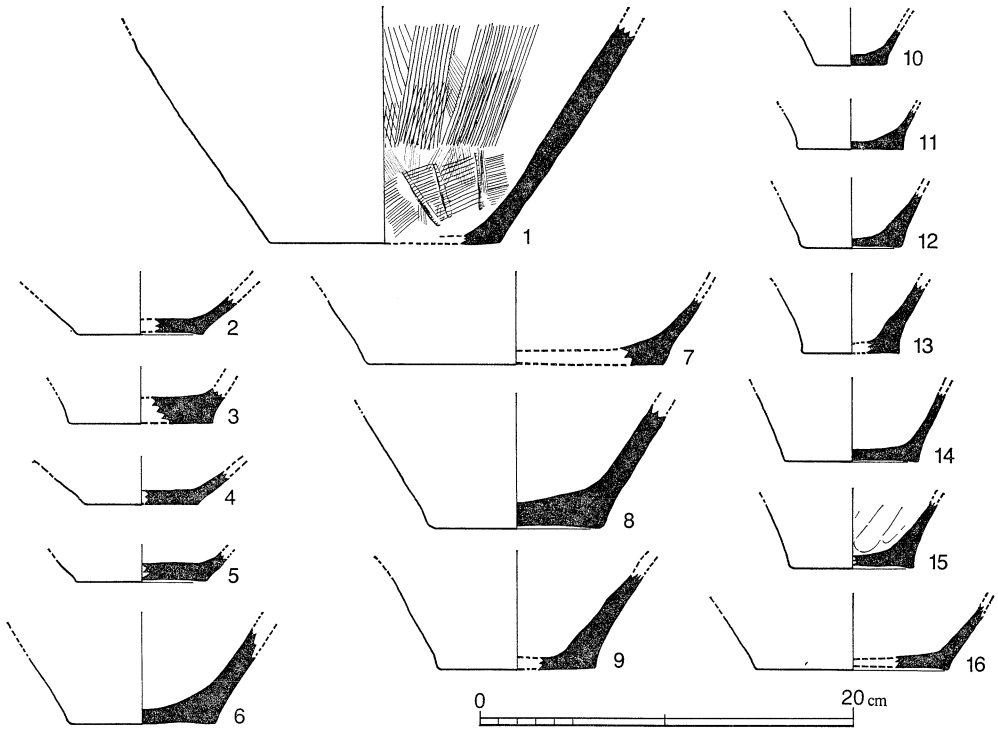


図17　弥生土器実測図　(5)　壺・甕の底部

デが，口縁部から体部にかけて広範囲におよぶもの（9）もある。5は赤っぽい茶褐色，他は黄褐色系で，石英粒，長石粒を含む。

甕形土器B（図16—10～14）　10～12は，口縁端部のつまみあげが発達し，端面に凹線状の溝が走るものである。13は，端部が磨滅のため，形状が不確かであるが，10～12に比べ，屈曲部の厚さが他の部位よりも薄くなることはなく，また，口縁端部の拡張も少ない点で，他の土器と異なる特徴をもつ。口縁部内外面はヨコナデ調整であり，それが体部上半におよぶ。体部の上半部については，11・14の外面に縦方向のハケメが，11・13の内面にはヨコナデが確認できる。他については磨滅と風化のため，不明である。黄褐色系の色調である。

甕形土器底部（図17—10～15）　底径が4～7 cm 程度のものが多い。外面については，13の側面に縦方向のハケメが見られるほか，15では底部縁辺を2本の指ではさんでヨコナデしたあとが見られる。内面では，15において縦方向のユビナデのあとと思われる，くぼみが見られる。全体に磨滅，風化が激しく，調整の観察が困難なものが多い。13のみ茶褐色で，他と少し異なる胎土であるが，他は黄褐色系で，石英粒，長石粒を含む。

(3)　**高杯形土器**（図18—1～4，図版8）

口縁部の形態を基準にして高杯形土器A・高杯形土器Bに分類する。

高杯形土器A（1・2）　直口で，ほぼ直立するタイプの口縁部をもつ。口縁部上端面は水平で，内側へわずかに拡張する。口縁下に凹線文を数条施すが，これらの凹線文は凹部の断面が深いV字形であることを特徴とする。黄褐色で，1 mm 以下の石英粒・長石粒を含む。

高杯形土器B（3・4）　口縁部が水平にひろがり，水平面の外端から幅広く垂下して，端面を形成するタイプである。水平面の内端には，1条の凸帯をめぐらす。4は無文で，水平面，端面ともに，ヨコナデ調整を施す。赤っぽい茶褐色で，石英粒・長石粒を含む。3は端部のみの破片である。浅い沈線状の凹線文を上部に2条，下部に1条施している。小片であるため，器形復原も困難を伴い，凹線文の配し方から見て，あるいは，直口型の高杯形土器の口縁部になる可能性も，否定できない。ヨコナデ調整を施す。黄褐色で，石英粒・長石粒を含む。黒斑部にあたる。

脚柱部（図18—5～10，図版8）　5・6は杯の底部から脚柱部にかけての破片である。これらの他に，杯底部にあたると考えられる，直径 5 cm，厚さ 1 cm 弱の円板状の土製品が出土しており，円板充填法によって高杯形土器が製作されたことを示すものである。5・6の外面には縦方向のヘラミガキ，6の内面には時計回りで横方向および斜め左下へのヘラケズリが見られる。黄褐色で，1～2 mm 大の石英粒・長石粒を多く含む。

7・8は，脚柱の部分である。高杯形土器と考えられる。篦描沈線を数条ずつ2帯に分けて施す。外面には縦方向のヘラミガキ，内面にはしぼりめ（7）が観察できる。また，7の内面下部には横方向に篦描沈線状の溝が走っているが，これはヘラケズリの際，工具の角があたっ

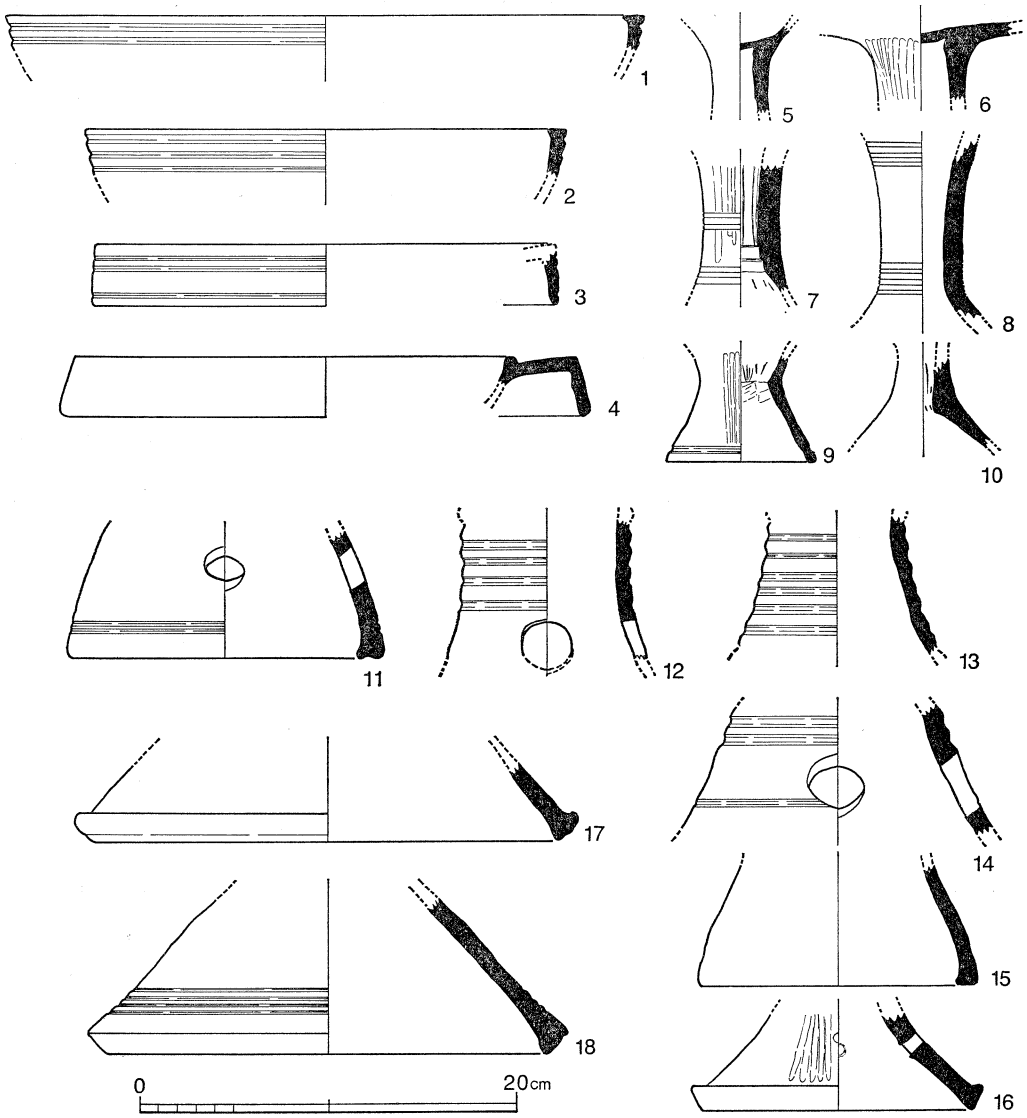


図18　弥生土器実測図 (6) 高杯・器台

たものであろうか。7は茶色，8は黄褐色で，石英粒・長石粒を含む。

9・10は脚柱部から裾部にかけての破片である。高杯形土器と考えられる。9は下端部付近に凹線文を1条めぐらす。外面は縦方向のヘラミガキ，内面にはしぼりめ，横方向のヘラケズリが確認できる。赤っぽい茶褐色で，石英粒を含む。10は外面に縦方向のヘラミガキが施されている。黄褐色で，石英粒と長石粒を含む。

脚台部（図18—15〜18，図版8）　器台あるいは高杯形土器・台付鉢形土器の脚台部と考えられるものである。

15は全面に風化，磨滅が激しく，表面の調整，文様の観察はできない。あるいは，現在表面

表2　口縁部の文様構成

内面＼端面	波状文	凹線文	凹線文・円形浮文	不明	計
波状文	1				1
扇形文	2			2	4
列点文			2		2
無文	1	1			2
不明			1		1
計	4	1	3	2	10

※　凹線文・凸帯文・円形浮文以外は，すべて櫛描文である。なお「不明」は，風化，欠損のため，文様の有無の確認ができないものである。

に残る若干の起伏から推して，凹線文が数条施されていた可能性もある。

16は直径 7 mm の円孔をもつものである。内面の円孔周辺部に粘土の盛りあがりが見られるので，外側から，焼成前に穿孔したものと考えられる。一部しか残存していないので，円孔がいくつ配されていたかは不明である。外面は縦方向のヘラミガキ，端部はヨコナデする。内面は磨滅のため調整不明である。

17は大型品の脚部である。全面ヨコナデ調整を施す。

18も大型品の脚部であって，裾下半部に凹線文を4条めぐらす。端部が上方に拡張されない点で，16や17と異なる。端面はヨコナデ調整，他は磨滅のため調整不明。

いずれも，黄褐色系で，石英粒と長石粒を含む。15・17・18の胎土には，クサリ礫の微粒子を含む。チャートを含むもの（15・18）もある。

(4)　**器台形土器**（図18—11～14，図版8）

中央部・裾部の破片のみで，口縁部の破片は出土していない。中央部および裾部に凹線文を数条重ねて施し，その間に直径 2～2.5 cm の円形透孔を配置する。いずれの土器片も，風化，磨滅のため，調整の観察は困難であるが，内面のヨコナデが見られるもの（11・14）がある。黄褐色で，2 mm 程度の大きさの石英粒，長石粒を多量に，また5 mm 大のチャートの細粒を少量，クサリ礫微粒子を若干含む。

(5)　**把　手**（図12—16，図版5）

半環状の把手が1点出土している。水差形土器か，鉢形土器の把手であろう。黄褐色で，石英粒と長石粒を含む。

以上，本遺跡出土の土器について，器種ごとに分類し，説明を行なった。これらは畿内第3・第4様式に属するもので，生活に必要な各器種は，一通り，そろっている。文様構成の特徴は次に詳しく述べるが，口縁部端面には櫛描波状文や凹線文を，内面には櫛描列点文や櫛描扇形文を，また頸部・腹部には，櫛描直線文と櫛描波状文を多用するものであり，それは摂津地方の各遺跡にも共通する特徴である。

待兼山遺跡出土土器の胎土は，黄褐色系のものが多く，石英粒と長石粒を比較的多量に含む

表3　頸部・腹部における文様使用頻度

文　　様	片　数
直　線　文	17
波　状　文	15
簾　状　文	1
列　点　文	1
流　水　文	1
凹　線　文	5
凸　帯　文	3
円 形 浮 文	1
文 様 片 数	36
櫛描文様片数	28

表4　頸部・腹部における文様の組み合わせ

文　　様	片　数
直線文と直線文	4
直線文と波状文	6
簾状文と列点文	1
流水文と円形浮文	1
計	12

※　凹線文，凸帯文，円形浮文以外はすべて櫛描文である。

ことが特徴である。なお，暗茶褐色系で角閃石を含む，いわゆる生駒西麓産といわれる胎土の土器が，8片出土した。すべて2〜3.5 cm 四方の小片である。図13—2に見られる文様構成とともに，河内地方との交流を示唆するものとして，注目したい。

(6)　土器の文様構成についての若干の考察

今回出土した土器片のうち，文様が確認できたものは，口縁部10片，頸部・腹部あわせて36片である。これを各部位ごとに，各種文様の使用頻度と，文様の組み合わせ方についてまとめたものが，表2〜表4である。明らかに同一個体であるとわかるものを除いて集計した。

口縁部（表2）　端面・内面の片方，あるいは両方に，文様が認められるものを対象にした。すべて，漏斗状にひらく口頸部から，上方，あるいは下方へ拡張した端部へと続くタイプの広口壺形土器であり，本報告書における壺形土器A・B・Dに属する。

表2から，まず，口縁部に用いられる文様を見ると，端面には櫛描波状文，凹線文，円形浮文が，内面には櫛描波状文，櫛描扇形文，櫛描列点文が施されていることがわかる。（図15—3〜6）ただし，円形浮文は単独で用いられることはなく，必ず凹線文と組み合わせて用いている。内面の櫛描扇形文は，前述したように扇形の中心角が小さいものばかりであり，列点文との区別が定かでないような類のものも含んでいる。

端面の文様と内面の文様の組み合わせ方については，同じく表2から，端面が櫛描波状文である場合は内面には櫛描扇形文か櫛描波状文を，端面が凹線文である場合は内面には櫛描列点文を施していることがわかる。

これを，猪名川流域の他の遺跡との比較で捉えてみよう。本遺跡と同時期で，文様片の集計が報告されている遺跡には，勝部遺跡と田能遺跡がある。各報告書掲載の表[11]から，両遺跡に多用される文様に注目すると，両遺跡とも，口縁部端面には櫛描波状文あるいは凹線文，内面には櫛描波状文，櫛描列点文，櫛描扇形文が多いことがわかる。これは待兼山遺跡にも共通す

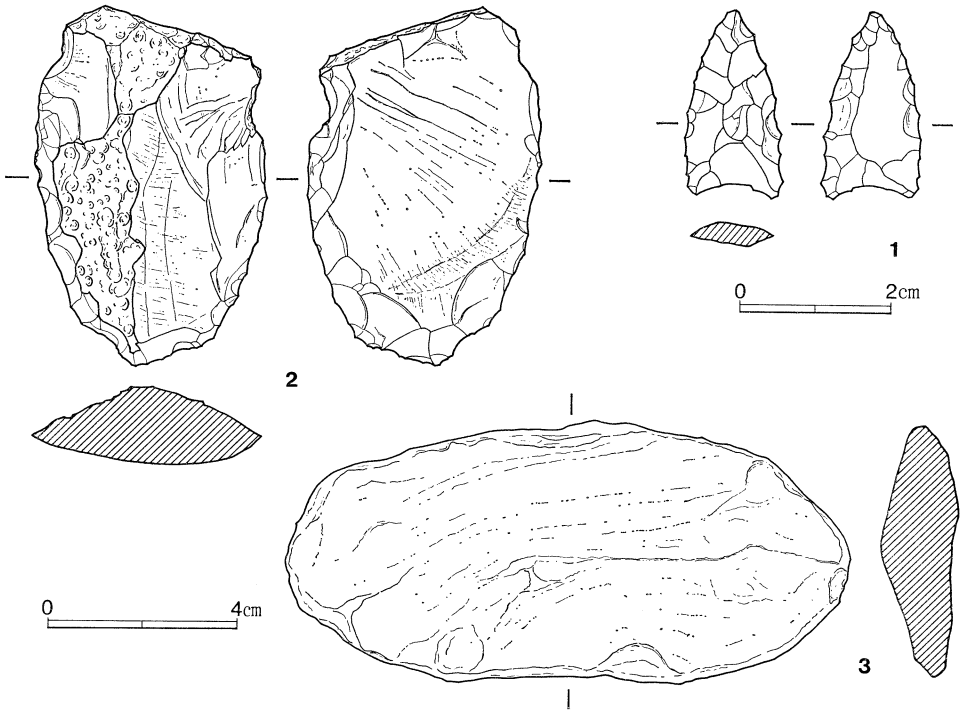


図19　石器実測図（1の石鏃は実大，他は½）

る特徴である。

頸部・腹部（表3・表4）　頸部・腹部に多用されるのは櫛描直線文と櫛描波状文である（表3）。組み合わせ方としては，櫛描直線文と櫛描直線文（図15―2），櫛描直線文と櫛描波状文（図15―7）というパターンが主流である（表4）。

ここでも，勝部遺跡・田能遺跡との比較を行なう。各報告書掲載の表[12]より，両遺跡とも，櫛描直線文・櫛描波状文・櫛描斜格文の順に多用していることがわかる。櫛描直線文と櫛描波状文の使用頻度が多いのは，待兼山遺跡と共通するが，勝部遺跡で10.8%，田能遺跡では14.6%の高頻度[13]で用いられる櫛描斜格文が，待兼山遺跡では出土していない。これは，土器片の総数が少ないことに起因するのであろうか。

以上，全体の数量は少ないが，文様片を集計し，その中から待兼山遺跡の土器の特徴を抽出してみた。その結果，文様構成で比較する限り，本遺跡の土器は勝部遺跡や田能遺跡と類似の特徴をもち，猪名川流域に一般的な文様構成をとることが判明した。また，これらの遺跡よりも北方に，猪名川を溯れば，加茂遺跡・栄根遺跡が，やはり同時期の遺跡として存在する。これらの遺跡については，文様構成に関する土器片の集計資料が，現在までのところ公表されていないので，数量を把握したうえでの客観的な比較をすることはできないが，公表された資料を見る限りでは，待兼山・勝部・田能の各遺跡と，ほぼ同傾向の文様構成をとると考えてよい。近年，土器の地域性についての研究は，ますます進みつつあるが，今後，より客観的に，

精緻に，これを捉えていくには，同一基準による統計資料を蓄積し，比較していく作業が必要である。

2　石　　器

石器は３点出土した（図19）。１は立会調査時にＢトレンチの溝状落込み内堆積土中から発見された凹基式の石鏃である。サヌカイト製で長さ 2.5 cm，幅 1.3 cm，重さ 1.0 g をはかる。片面は全面にわたって細部調整が施されているが，他方の面は大剝離面を残して縁辺部に細部調整を行なっている。２はサヌカイト製の不定形剝片石器で長さ 9.5 cm，幅 6.1 cm をはかる。Ｅ区の暗黄灰色礫混じり粘質土層中より出土した。片面は風化によってあばた状となった原面が残っており，他方の面は大剝離面となっている。両面とも直線を呈する一辺を除き縁辺部に連続する細部調整を施して一応刃部をつくりだしているが，その調整は粗雑である。これら２点のサヌカイト製の石器は表面の風化がかなり激しい。３は丘陵南部の表土中から出土したものである。長さ 15.0 cm，幅 6.8 cm の不整長円形で，節理にそって板状に割れ周囲は磨滅している。これを人工品とすれば石庖丁の半成品の可能性が考えられる。なお，石材は大阪大学教養部助教授中世古幸次郎氏の肉眼鑑別によると結晶片岩であり，近畿地方では紀ノ川流域産の可能性が高いということである。

注 1）実測図を掲載したもの以外に，形状のわかる土器片は壺形土器口縁部約20点，甕形土器口縁部約30点，高杯形土器あるいは鉢形土器口縁部約10点，底部約20点，脚部４点程度である。また，文様を有する土器片も約20点あるが，これについては，文様構成についての項で紹介する。

なお，本遺跡出土土器の器種構成は，以下の通りである。壺形土器48％，甕形土器35％，鉢形土器３％，高杯形土器８％，器台形土器６％。（器台形土器以外は，口縁部破片１片を１点として，個体識別をおこなった。総数66点中の比率で示す。）

2）壺形土器Ａ～Ｄの分類は，本書独自のものであり，佐原真「畿内地方」（小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成』本編２，1968年）の分類に従ったものではない。

3）扇形の弧の長さが短くても，櫛原体を，意識的に弧を描くように動かして施文しているものは，扇形文とする。

4）佐原真「土器製作技術の変遷」（小林行雄・佐原真『紫雲出―香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究』詫間町文化財保護委員会，1964年）p. 141。

5）佐原真「土器の相対年代」（前掲『紫雲出』）p. 53に，「凹線文をとりいれた段階の土器であって，これを中期第三段階（中期３）とし，凹線文手法をまったくみない中期２と，凹線文のもっとも発達した中期末（中期４）とのあいだに位置するものと考えることができる。」と解説されている。

6）集計の対象として，以下に掲げる報告書掲載の実測図を用いた。

末永雅雄・富田好久・亥野彊・石野博信『摂津加茂』（『関西大学文学部考古学研究報告』第３冊，関西大学，1968年）。

岡野慶隆・田中達雄・深井明比古・池田正男『栄根遺跡』（兵庫県教育委員会・川西市教育委員会，1982年）。

福井英治編『田能遺跡発掘調査報告書』（『尼崎市文化財調査報告』第15集，尼崎市教育委員会，1982年）。

鳥越憲三郎・藤井直正・荻田昭次・江谷寛・瀬川芳則『勝部遺跡』（豊中市教育委員会，1972年）。

田代克己・奥井哲秀編『東奈良一発掘調査概報Ⅰ（本文編）』（東奈良遺跡調査会，1979年）。

7）佐原真「弥生式土器の製作技術」（注4前掲『紫雲出』）p. 24。

8）都出比呂志「出土遺物」（京都大学安満遺跡調査団編『高槻市安満遺跡の条里遺構』京都大学，1973年）p. 31。

9）注4）・注5）による。

10）佐原真「畿内地方」（注2前掲）。

11）荻田昭次「弥生式土器小論」（注6前掲『勝部遺跡』）pp. 157～159，第28～第30表。福井英治「弥生式土器」（注6前掲『田能遺跡発掘調査報告書』）p. 488，表49。

12）荻田昭次「弥生式土器小論」（注6前掲）p. 154，第26表。福井英治「弥生式土器」（注6前掲）p. 489，表50。

13）前掲注12）文献より，筆者が計算した。

第４章　待兼山遺跡と周辺の遺跡

１　旧地形の復原

旧地形図との対比　第２章で述べたように，今回の発掘で検出した土器や石器は弥生時代において，丘陵の高位部にあった集落で捨てられたものが下に流れて堆積したものと考えられる。では，この集落の中心部の位置はどこに考えられるであろうか。この問題を考察するためには，理学部の造成によって改変を受ける前の過去の自然地形の復原が必要となる。

さて，この遺跡の周辺地域において，かつての自然地形を大きく改変した原因は，1926年に始まる旧制浪速高校の開設，第２次大戦後の米軍キャンプの建設などがあるが，改変の規模の大きさにおいて，大きな画期とすべきは第２次大戦後に始まる阪大学舎の増設である。北東部のグラウンド，中央部から東南部にいたる，文・法・経各学部および図書館，そして基礎工学部，理学部などの造成工事によって，起伏に富む，かつての地形は大規模に削平され，現在，我々が見るような景観となった。この変化を考察し，旧地形の復原を試みるために，旧制浪速高校開設以前の1922年の陸地測量部の２万５千分の１の地形図と，現在の「大阪大学石橋団地配置地図」（3,000分の１）とを同一縮尺に統一して重ねあわせたものが図版１である。これを見れば，現在の建物の立地点が過去のどのような地形上にあるかが一目瞭然となる。

最も大きな改変を受けているのは，北部のグラウンド部分と，文・法・経各学部建物から理学部にいたる中央部であり，後者では西北から東南にむかってのびる２つの舌状の丘陵尾根の大部分を削平しており，標高でいえば，かつての 65 m から現在の 55 m にまで比高にして約 10 m も削られたことが判明する。とくに注目すべきは，過去の地形図をみると文・法・経建物から基礎工学部付近の尾根上には直径 30～50 m のマウンド状の地形が２個所で認められ，これが古墳であった可能性も否定できない。

集落中心部の立地点　つぎに今回発掘した遺跡の周辺に目を移すと，超高圧実験施設と「大高の森」のある丘陵高位部は，今も過去の地形を反映して高くなっているが，かつては，この部分の標高が 70 m と最も高く，ここから東南東にむかって長さ約 500 m の丘陵尾根が舌状にのびており，今回の発掘地点はその東端の裾にあたっている。この間の比高差は約 15 m となる。この丘陵尾根の東と南とには二尾池があるが，おそらく，この池は近世以降のものであり，それ以前は谷地形であったと考えられる。

以上に述べたかつての地形の特徴は，弥生時代と大きく変わるところがないと考えられるから，今回の発掘地点における斜面堆積物は，その西側の高位部から流されたものであると言えよう。堆積物の弥生土器片は磨滅を受けているものが比較的少なく，近距離地点からの流入と

考えうることも，これと整合的である。

こう考えれば，現在の「大高の森」付近および理学部本館とサイクロトロン施設のある範囲が，弥生時代の集落の営まれた場所として最も可能性が高いと考えられるのである。つまり，西から東に舌状にのびる丘陵尾根の，標高にして 70～55 m の範囲に当時の集落が立地したと考えてよかろう。

図20は大阪大学50年史編纂室に保管されている1962年当時の阪大豊中キャンパスの空中写真である。理学部の建物はまだなく，丘陵東部が大きく削平を受けた直後の状態を示している。写真の右端にマークしたところが今回の発掘地点にあたる。

2　待兼山遺跡の性格

高地性集落　待兼山遺跡における弥生時代集落の立地を以上のごとく考えれば，この立地点の地形的特徴から，これを高地性集落の一つと考えることができる。すなわち，弥生時代の集落を，その立地環境によって大別すると，沖積低地の微高地あるいは山麓部に立地する低地性のものと，丘陵の高位部や山頂部に立地する高地性のものとに分かれることは古くから知られており，後者の高地性集落の研究は，この十数年で大きく前進した。高地性集落の出現要因については様々の説があるが，「魏志倭人伝」などが伝える「倭国乱」に示されるような，弥生時代における政治的緊張を反映して，高地に居を構えて防禦的機能を強めた集落形態と考えるのが妥当であろう[1]。

筆者は，この高地性集落を2つのタイプに分類している。比高差が 100 m を越えるような急峻な山頂や丘陵頂部にあって，低地の水田の耕作を維持する上で不便な場所にあるAタイプと，比高差は 30 m 内外で，水田との距離もさほど遠くはないBタイプとがそれである[2]。

Bタイプは準高地性集落とでも呼ぶべきものであるが，待兼山遺跡の場合は，猪名川左岸の氾濫原との比高が約 50 m，北側の箕面川や南側の千里川のつくる開析平野との比高差が 30 m 内外であり，低地との距離も 1 km 程度であるから，このBタイプに属すると考えてよいであろう。

周辺の遺跡との関係　ふつう，弥生時代の高地性集落は低地の集落と有機的な関係をもって存在しており，低地にある大規模な母村を中核として，母村から分岐した分枝集落としての性格をもつ。そして他集団との戦闘の際には，高地に居を構えて，他集団の動きをいち早くキャッチする見張り機能や，その情報を同盟関係にある他集落に知らせるような役割を担っていたと考えられ，さらに，時と場合によっては「逃げ城」的性格をも有したと考えられる。

では，待兼山遺跡の場合，有機的に結びつきあう集落はどの遺跡と考えられるであろうか。猪名川左岸の弥生時代集落遺跡は二十数個所で確認されているが，このうち中期の遺跡に注意すると箕面川水系には，弥生中期に成立した宮の前遺跡が大規模な集落であり，遺跡は東西

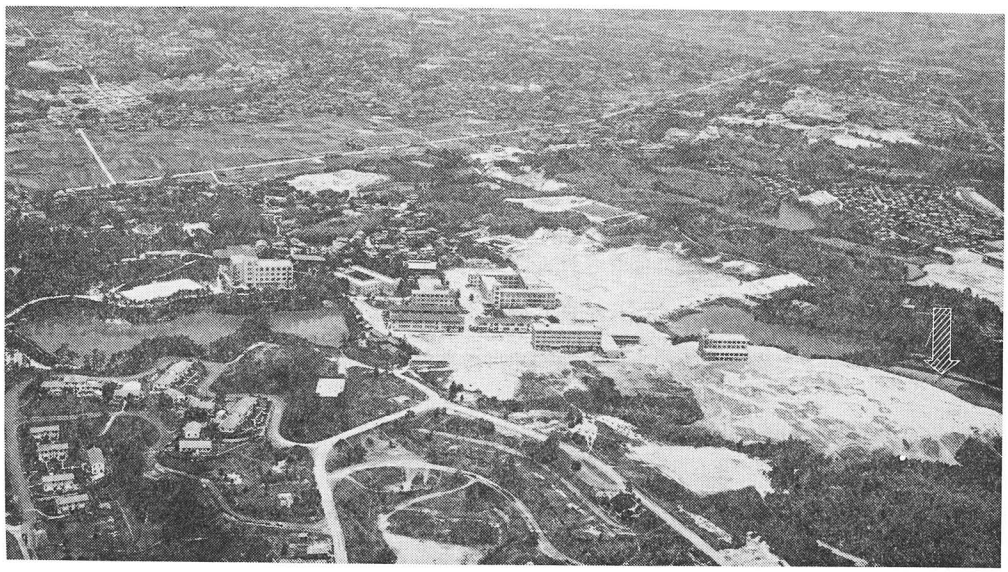


図20　1962年当時の大阪大学（大阪大学50年史編纂室提供，矢印が遺跡地）

600 m，南北 300 m の範囲に広がっており 中国縦貫道建設に伴う調査で 20余基の方形周溝墓群が検出され，また近年の調査で，この南の螢池付近に集落遺跡が検出され（図21），宮の前を墓地区とすれば，後者は居住区と考えることもできる。さらに，この南の千里川水系では勝部遺跡が母村的な大規模集落であり，弥生前期から中期に継続している。

このうち待兼山遺跡に近いのは宮の前遺跡であり，両者間の距離は約 1 km である。待兼山遺跡は宮の前遺跡と螢池西遺跡とを母村とする分枝集落の一つと考えることができよう。

これまで，猪名川水系における弥生時代の高地性集落としては，池田市五月山の標高 213 m の山頂にある五月山遺跡が著名であり，これは，筆者の分類によるAタイプの高地性集落に属するものである。ところが，千里丘陵のうち猪名川平野に面する西半部では豊中市野畑，同青池，同南刀根山などの遺跡が丘陵上の遺跡として知られている[3]が，その実態はまだ詳しくは判明していない。

この点において待兼山遺跡は，標高 65～70 m の丘陵の高位部に立地して，西の猪名川平野を眺望し得るのみならず，北方は三島郡にぬける旧西国街道に面している。本遺跡がこのような交通の要衝に立地する高地性集落の一部であると判明したことは弥生時代高地性集落の研究に，貴重な資料を提供するものといえよう。

注 1）小野忠凞編『高地性集落の研究』資料篇，学生社，1979年　によって近年の研究動向を知ることができる。

2）都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」（『考古学研究』第20巻第4号，1974年）p. 40。

3）豊中市教育委員会『豊中市文化財分布図』1981年。

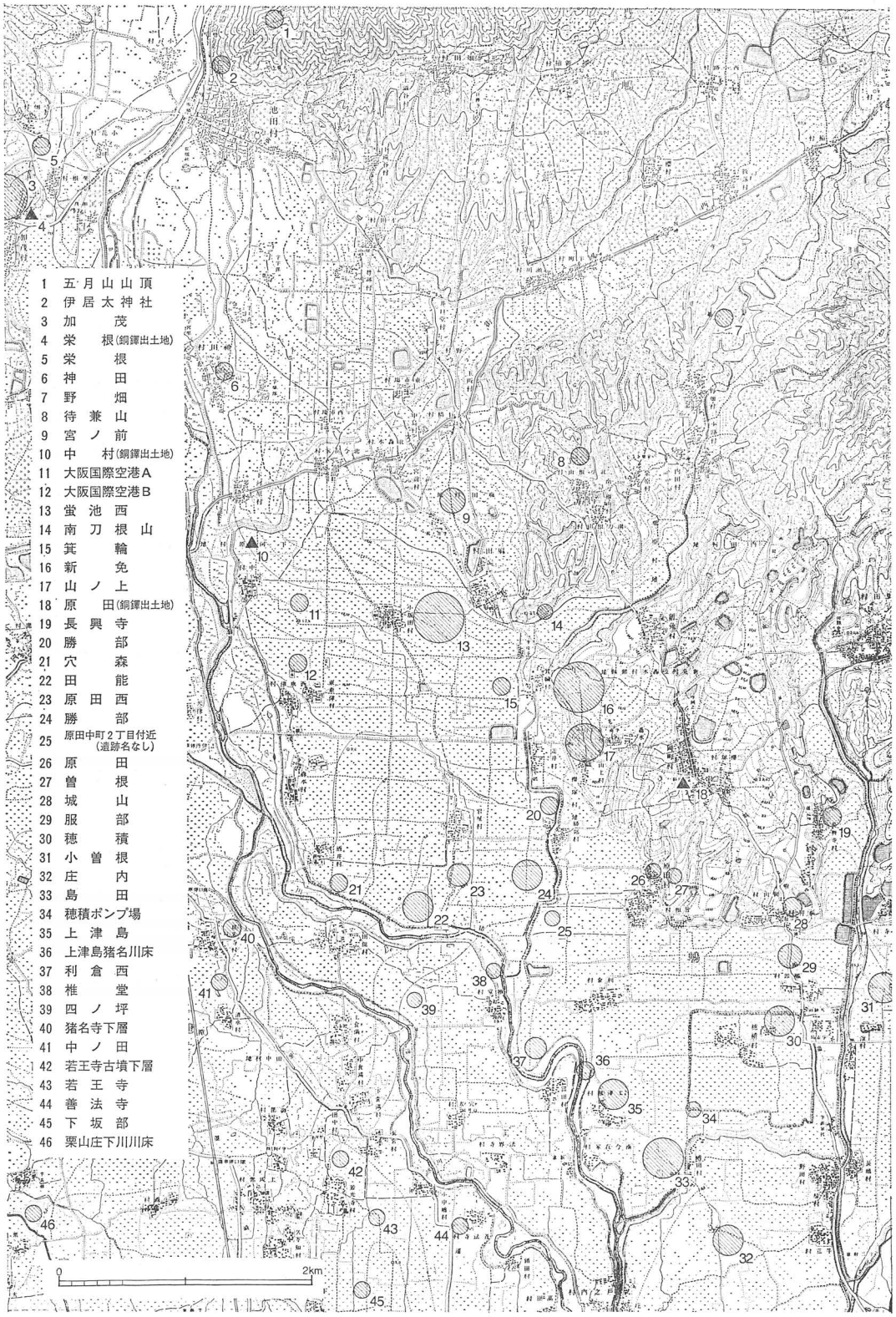


図21　猪名川水系の弥生時代遺跡の分布

第5章　総　　括

第4章までの叙述において，この遺跡の学術的価値は明らかとなったと思われるが，ここにあらためて，その要点を列挙しておくことにしよう。

1　待兼山遺跡は，弥生時代中期の，畿内第3・第4様式の土器を出土する集落遺跡の縁辺部であり，集落で使用された土器や石器の破片が，急激な土石流とともに丘陵東斜面に流されて堆積した遺物包含層と考えられる。

2　旧地形を復原すると，今回の発掘地点の西には標高65～70 m の丘陵尾根が続いており，この尾根上の平坦面に弥生時代の集落の中心部があったと考えられる。その場所は現理学部建物付近と推定され，理学部建設のための造成工事によって破壊されたものと考えられる。

3　集落の立地条件の特徴から，この集落は高地性集落の性格を有しており，西は猪名川両岸の平野部を眺望し，北東は旧西国街道が通る谷を見降ろす交通の要衝にあって，集団間に政治的緊張や戦乱があったと考えられる弥生時代中期における防禦集落として重要な位置を占めたと考えられる。

4　出土遺物は弥生土器と石器からなる。土器は畿内第3・第4様式のものを含み，中期の，ある期間に限られるが故に，出土資料数は多くはないとはいえ，西摂丘陵部の土器の編年論的研究および地域色の研究の上で，貴重な資料である。また，石器の中に，石庖丁の半成品と考えうるものがあり，その石材は結晶片岩であって，紀ノ川流域産の可能性が高く，弥生時代の石庖丁石材の流通を考える上で重要な資料をつけ加えたこともまた，特筆すべきことであろう。

5　今回の調査は大阪大学構内の遺跡に対する最初の学術的発掘であるが，構内には旧地形の保存されている部分が多くあり，第1章に述べたように，遺跡の存在を示す多くの資料が，これまでにも既に確認されている。そこには，この遺跡のような貴重な埋蔵文化財が眠っている可能性は大きい。したがって，今後，構内における遺跡の調査と保存のために充分な方策がたてられるべきである。

MACHIKANEYAMA SITE

A Report of the Yayoi Settlement Site Excavation Preceding the Construction of the Osaka University Radio-isotope Center

English Summary

by *Hiroshi Tsude*
Shinya Fukunaga
Naomi Aotani

March 1984

The Research Group for the Excavation
of the Machikaneyama Site,
Osaka University, Japan

CONTENTS

Page

Chapter 1 Progress of research 1
2 Site description 7
3 Artifact descriptions 11
4 Discussion 26
5 Conclusion 30
Appendix English summary 31

PLATES

1 Plan of the University campus showing its relation to the topographical map of 1922
2 1 Hill slope of the northern part of the excavation area
2 The southern part of the excavation area
3 1 Section of survey trench B
2 Section of survey trench K
3 Section of survey trench K in detail
4 1 Potsherds in the deposit of trench B
2 Potsherds unearthed in the northern part of the excavation area
5 1 Yayoi pottery: rim and neck of storage jars
2 Yayoi pottery: body of storage jars
6 1 Yayoi pottery: storage jars
2 Yayoi pottery: cooking vessels
7 1 Yayoi pottery: bottom of storage jars and cooking vessels
2 Yayoi pottery: bottom of storage jars and cooking vessels
8 1 Yayoi pottery: upper parts of pedestalled dishes
2 Yayoi pottery: lower parts of pedestalled dishes
9 Stone implements: (1) flake tool, (2) arrowhead, (3) reaping knife

FIGURES IN TEXT

Page

1 Fossil remains of crocodile *Tomistoma machikanense* (photo by the Department of Geology, Osaka University) 2
2 View of a ditch unearthed by the salvage excavation in 1982 2
3 Situation of Machikaneyama site 3
4 Panoramic view of the site 4
5 Scene of the excavation work 4
6 Arrowhead *in situ* at the site 4

7 Deposit on the hill slope 4
8 Diagram showing the process of excavation 5
9 Locations of survey trenches dug in the preliminary survey in relation to the excavation area 6
10 Stratigraphical profile of the northern part of the excavation area 8
11 Topographical map of the excavation area 9
12 Scale drawings of Yayoi pottery: (1) storage jars 13
13 Scale drawings of Yayoi pottery: (2) storage jars 14
14 Scale drawings of Yayoi pottery: (3) storage jars 15
15 Rubbings of patterns decoraing surfaces of Yayoi pottery 16
16 Scale drawings of Yayoi pottery: (4) cooking vessels 17
17 Scale drawings of Yayoi pottery: (5) bottoms of jars and vessels 18
18 Scale drawings of Yayoi pottery: (6) pedestalled dishes and stands 20
19 Stone implements: flake tool, arrowhead and reaping knife 23
20 Aerial view of Osaka University in 1962 28
21 Map of Yayoi period sites along the Inagawa River 29

TABLES

1 Relations of rim shape to jar neck decoration types 15
2 Varieties of decoration patterns on storage jar rims 21
3 Frequency of types of decoration patterns 22
4 Relation of decoration patterns on jar necks to jar bodies 22

SUMMARY

1) Machikaneyama site is situated on the southern tip of a low hill, Machikaneyama, on the Toyonaka campus of Osaka University, located in the northern part of Osaka prefecture. We conducted the rescue excavation there, from September 3 to October 11, 1983, immediately preceding the construction of the Radio-isotope Center of the University. Through our survey, the following important points have been clarified.

2) We found not only many potsherds but some stone tools in the deposits accumulated on the hill slope. These finds seem to have moved there from the upper part of the hill, where a settlement of the Yayoi period probably existed. So it is highly regrettable that the upper part was destroyed without any excavations at the time of the construction of the University campus some twenty years ago.

3) The pottery fragments, most of them broken into small pieces, number as many as 1500, consisting of various shapes: storage jars, cooking vessels and

pedestalled dishes. The jars are delicately ornamented by the use of a comb-like implement. Their decoration technique shows a regional characteristic typical of the northern part of Osaka Prefecture.

Analysing these potsherds we can demonstrate that they belong to the middle phase of the Yayoi period, which dates back to the first century A. D.

4) Stone implements consisted of an arrowhead, a flake tool and an unfinished reaping knife. The arrowhead and the flake tool are made of *Sanukite* thought to have come from Mt. Nijozan situated on the border of Osaka and Nara Prefectures, some 40 kilometers southeast of the site.

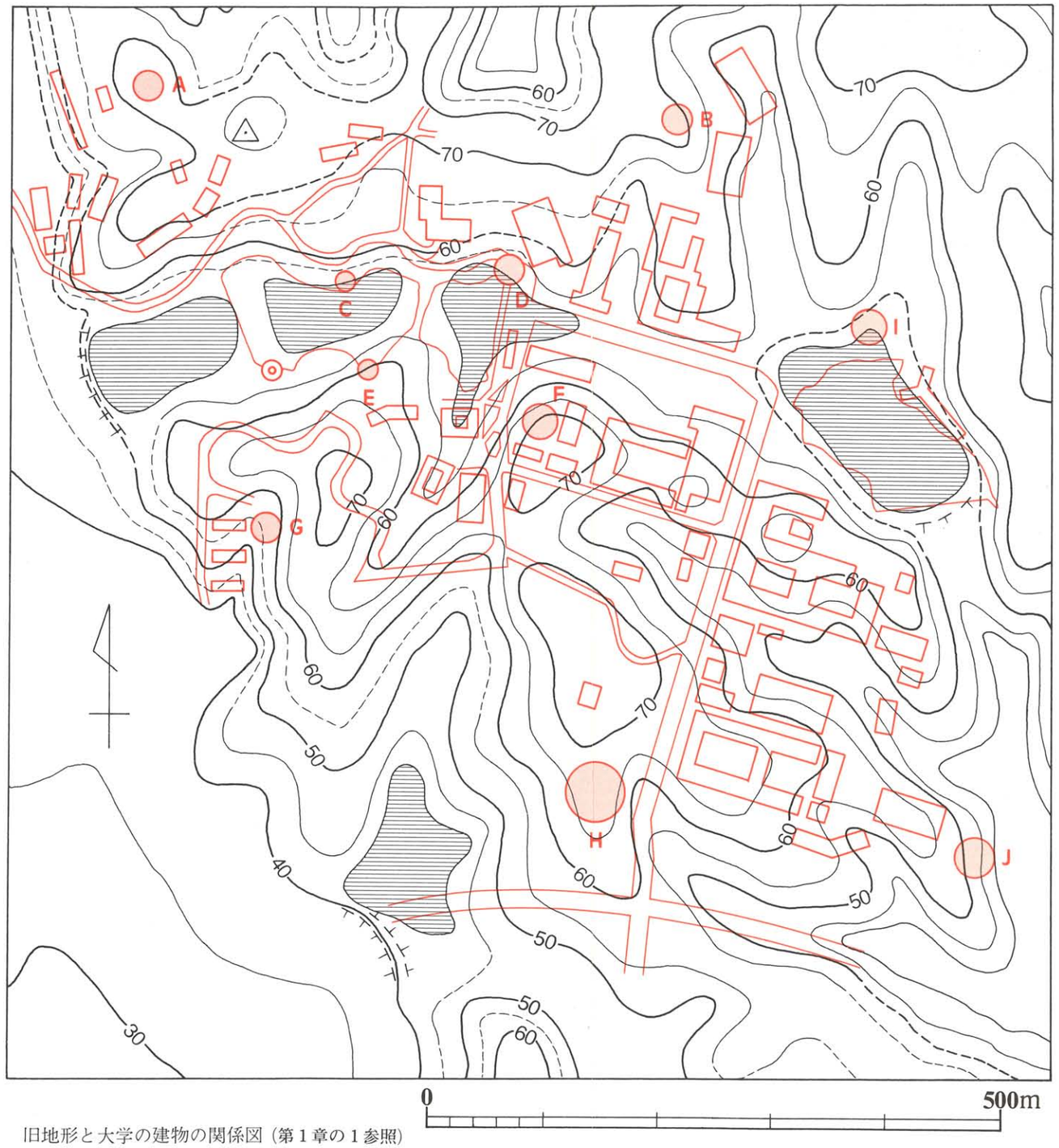
On the other hand, according to Prof. Kojiro Nakaseko of Osaka University, the reaping knife is made of schist, presumably brought from a region along the Kinokawa River of Wakayama Prefecture, about 70 kilometers southwest of the site. These facts indicate that the Yayoi people who lived there obtained tool materials from rather remote places.

5) It is noteworthy that the Machikaneyama settlement site is located on the upper part of the hill at an elevation of some 70 meters above sea level, with a relative height of 50 meters above the nearest plain. It must have been greatly inconvenient for the farmers of that time to live in such a settlement far from the alluvial plain where they were engaged in the cultivation of paddy fields.

In the Yayoi period, we usually find two types of settlement, one located on alluvial plains and the other on hill tops. Machikaneyama settlement belongs to the latter, presumably developed as a defence settlement on a hill top. This type of settlement was built to obtain forewarnings of enemies' movements, having a broad view of the surrounding area, and also it was occasionally built to fight against them utilizing its favorable location. It is written in Chinese documents that there were wars and conflicts among the communities in Yayoi period Japan. It seems that the increasing population at that period competed violently both for cultivated land and for water rights. The distinctive location of the Machikaneyama site must have been the product of these conflicts.

6) The excavation, though small in scale, not only has provided us with much information with which to reconstruct the every day life of the farmers who lived there in the Yayoi period, but also shows that other important sites may still be preserved within the University campus. We conclude that the University should establish better systems for the excavation and preservation of these valuable campus sites.

図　版

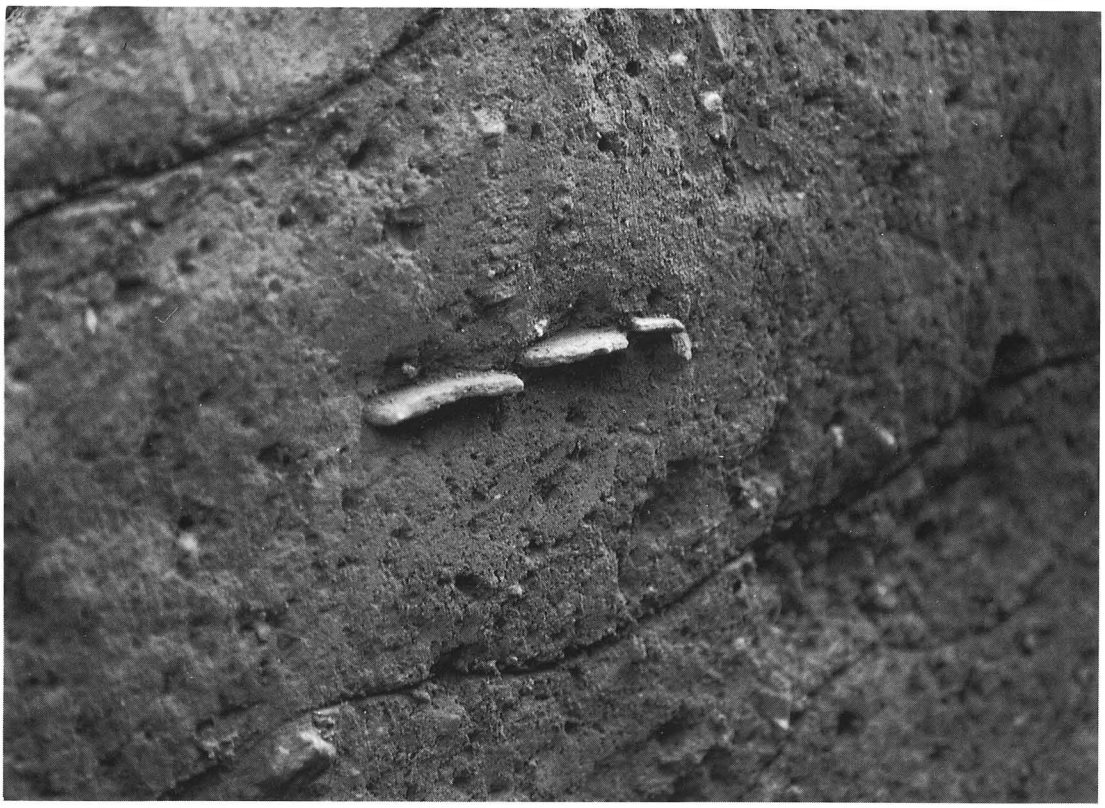


旧地形と大学の建物の関係図（第１章の１参照）

1　発掘区北部東斜面(北から)

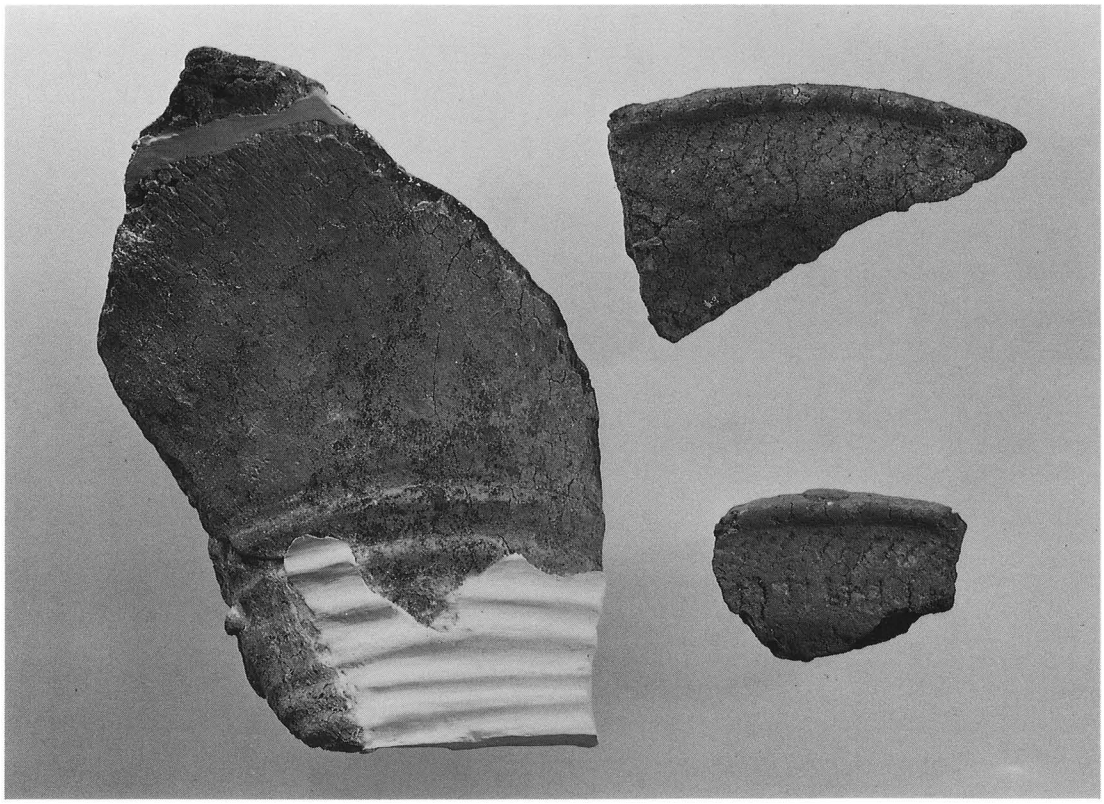
2　発掘区南部(南から)

1　Bトレンチ南壁土層(北から)，2　発掘区南部K区トレンチ南壁(北から)　3　同上の土層拡大(北から)

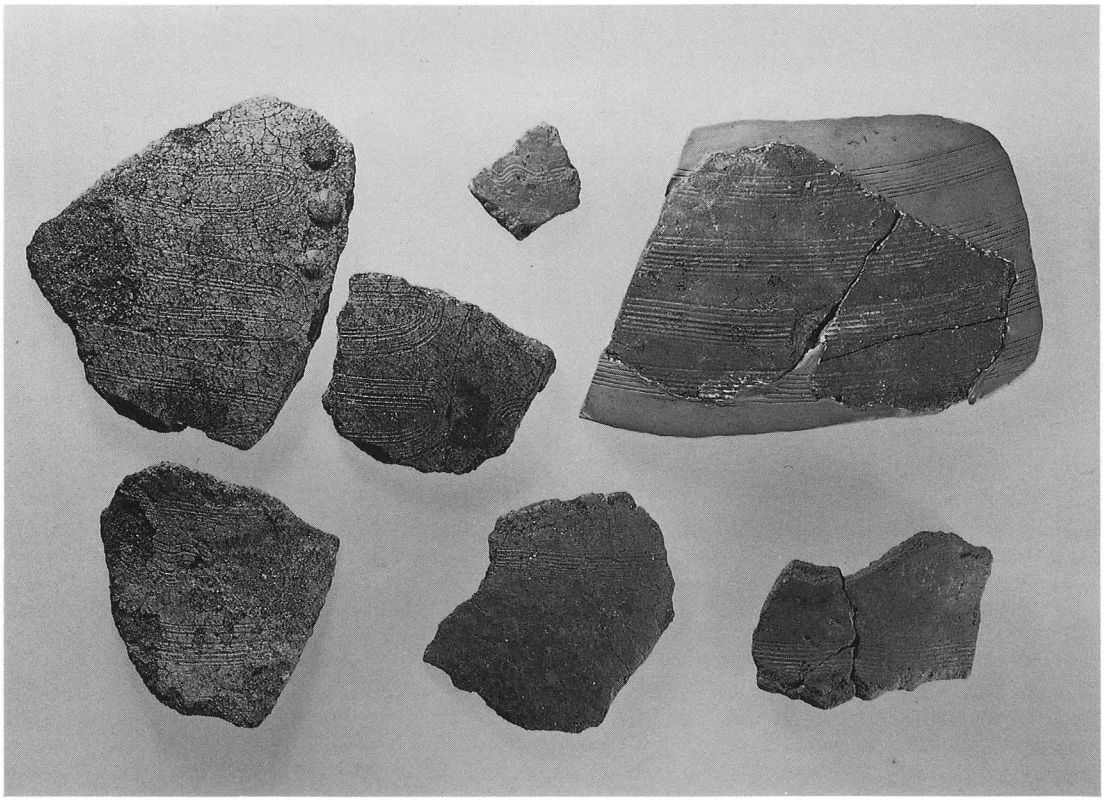


1　Bトレンチ南壁土器片出土状態

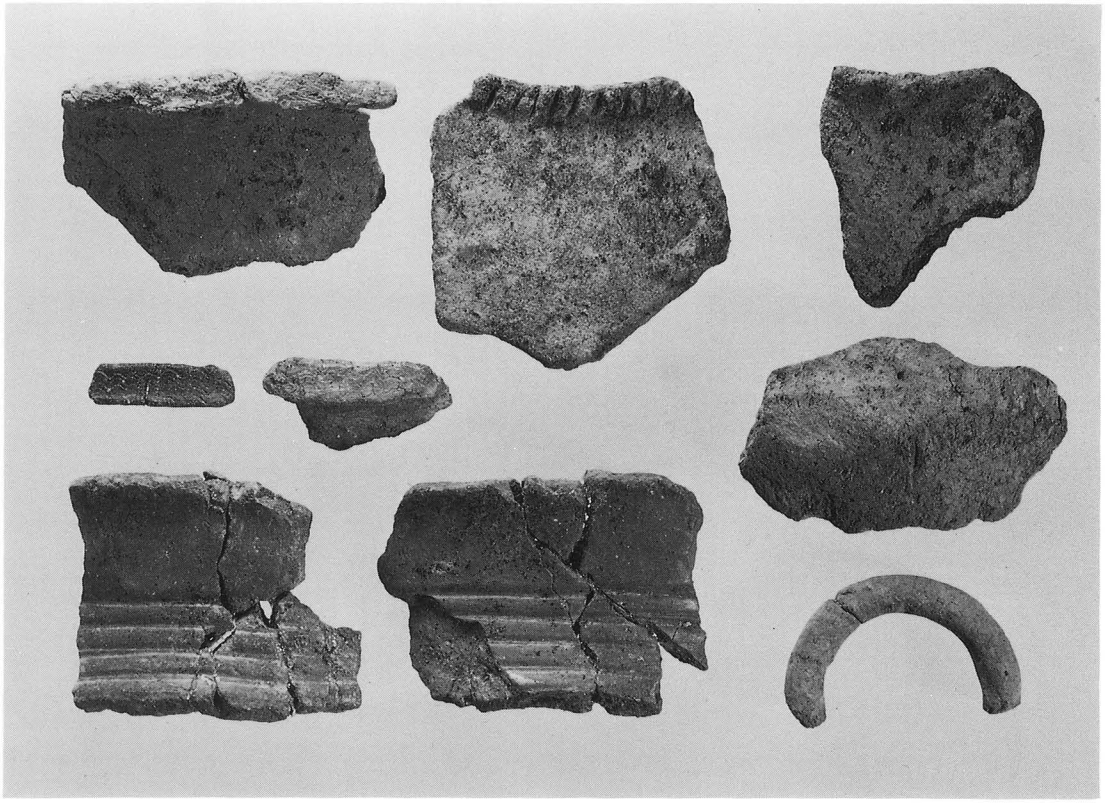
2　発掘区北部土器片出土状態



1　弥生土器　壺　頸部

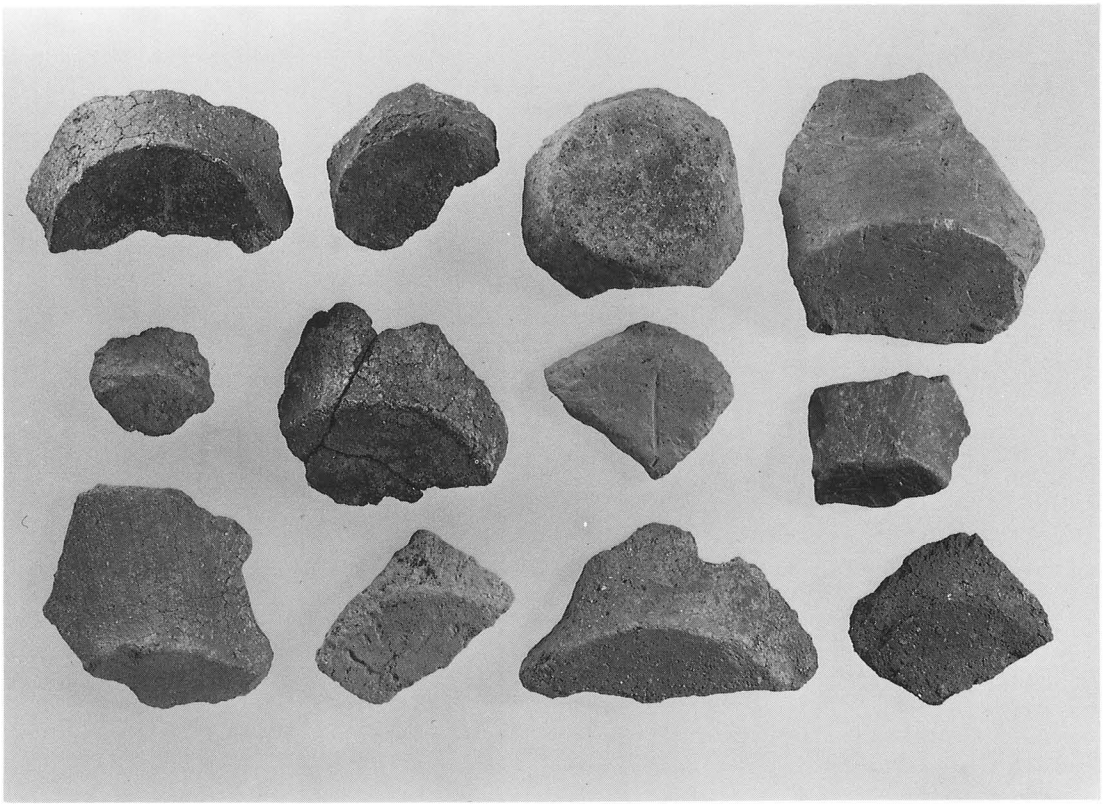


2　弥生土器　壺胴部・同腹部

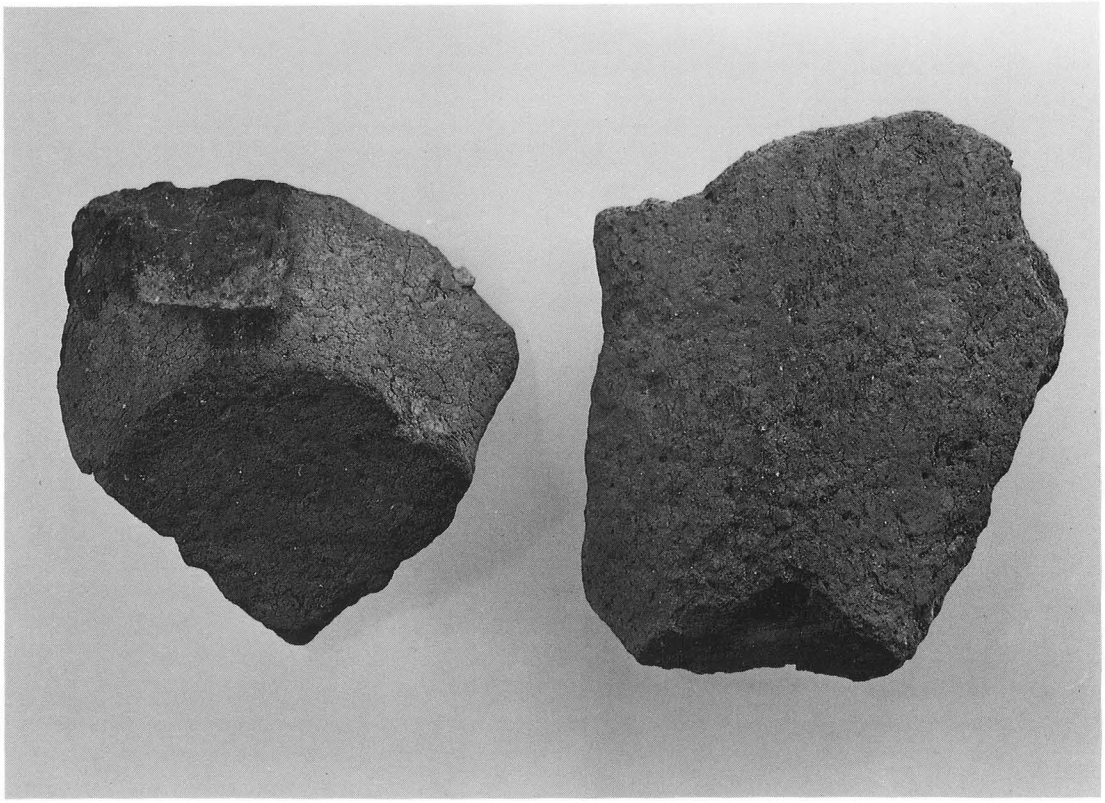


1　弥生土器　壺

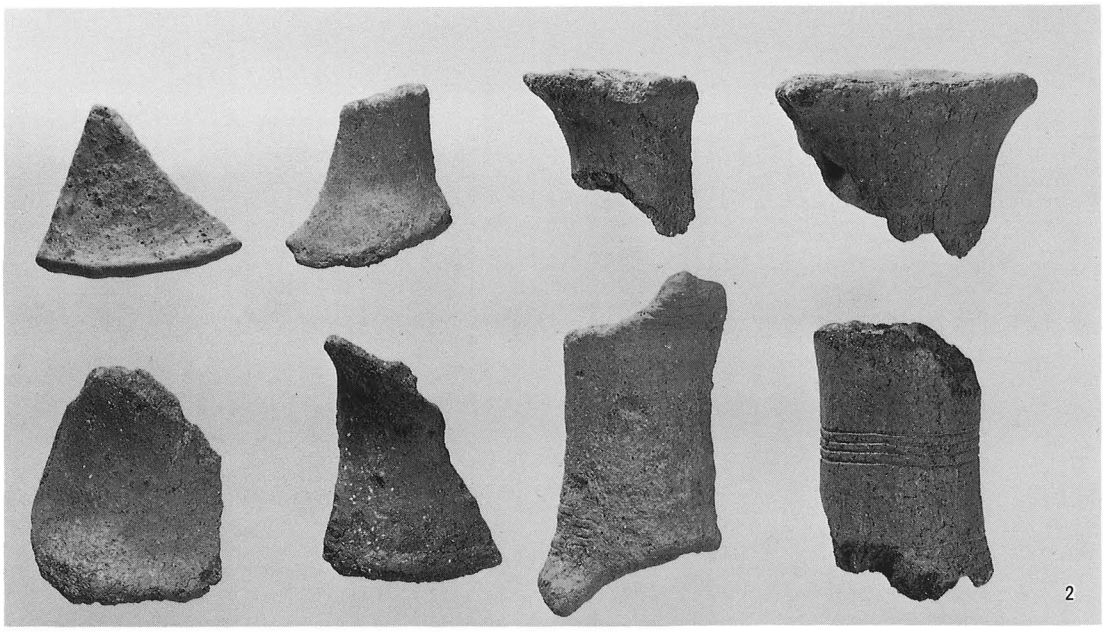
2　弥生土器　甕

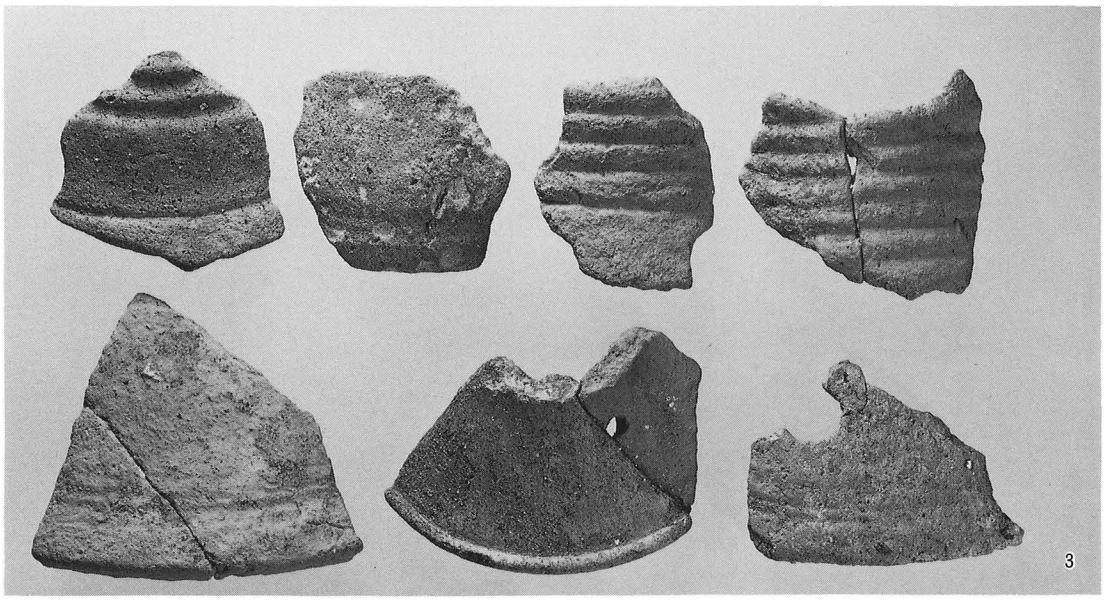


1　弥生土器　底部

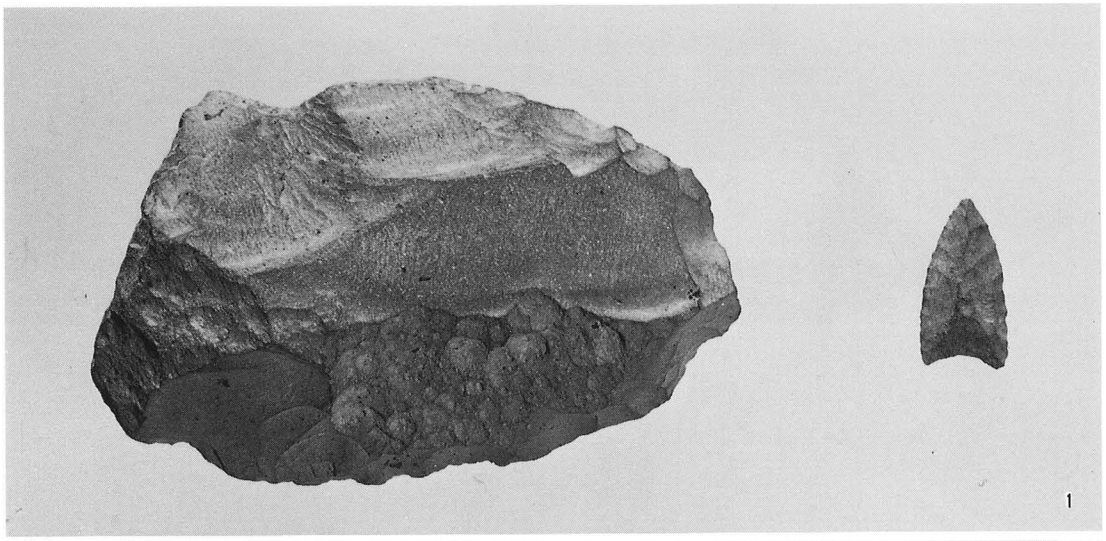


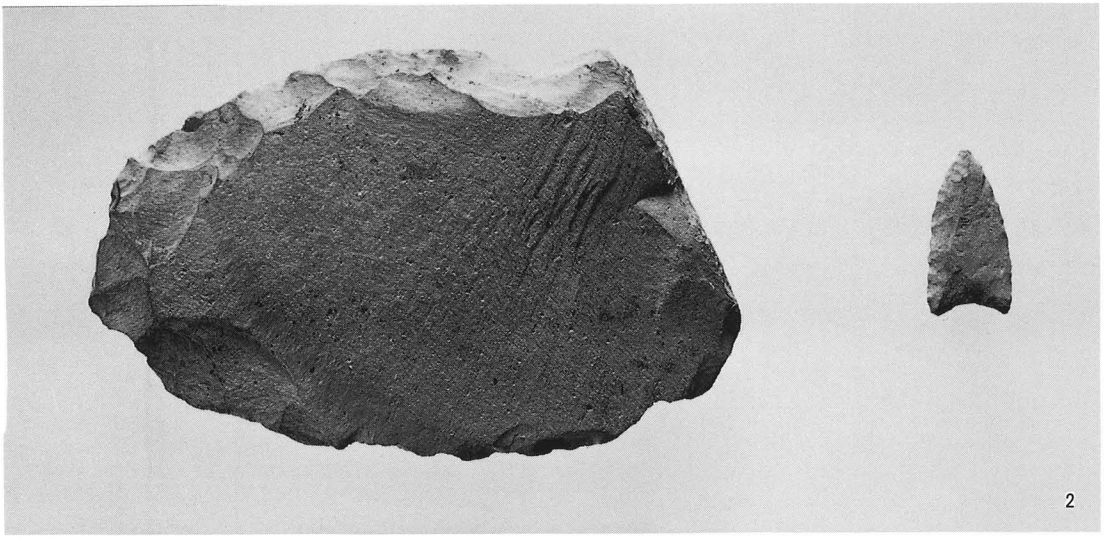
2　弥生土器　底部

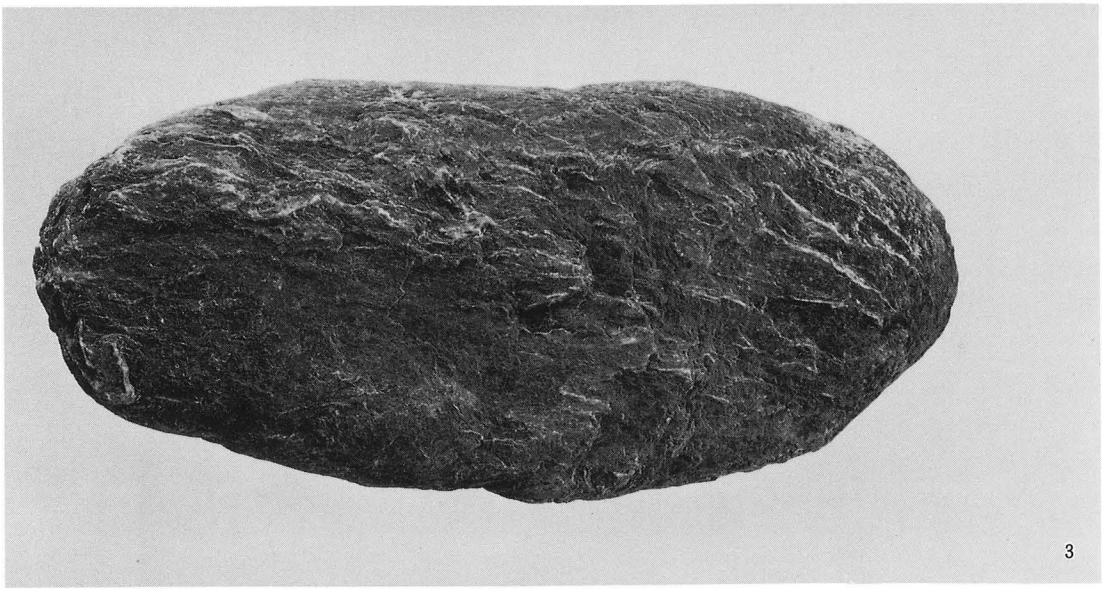




1　弥生土器　高杯杯部，2　弥生土器　高杯脚部，3　弥生土器　器台脚部







1　石器　剝片石器と石鏃(A面)，2　同上(B面)，3　石庖丁半成品

待　兼　山　遺　跡

1984年3月発行

編集　大阪大学待兼山遺跡発掘調査団
代表　都出　比呂志

発行　大　阪　大　学
大阪府吹田市山田上

印刷　株式会社 図書印刷 同　朋　舎
京都市下京区中堂寺鍵田町2
075—361—9121

MACHIKANEYAMA SITE

A Report of the Yayoi Settlement Site Excavation
Preceding the Construction of the Osaka University
Radio-isotope Center

by Hiroshi Tsude
Shinya Fukunaga
Naomi Aotani

March 1984

The Research Group for the Excavation
of the Machikaneyama Site,
Osaka University, Japan